Gilbert White 著 *The Natural History of Selborne* の書誌的研究

A Bibliographical Investigation into *The Natural History of Selborne* by Gilbert White

村　端　五　郎*
MURAHATA, Goro

ABSTRACT

The aim of this study is to investigate the bibliographies of a series of editions of *The Natural History of Selborne* by Gilbert White. The original work, a collection of letters addressed to two scholars, holds a uniquely qualified position in English classic literature of natural history (Ward & Walter 1913); hence, several hundreds of new editions or issues have been published after the first publication in 1789. This study is part of the research study on the classic's Japanese translation work by Nishitani Taizo (pseudonym), a populace English literature scholar of Sakawa-Cho, Kochi, Japan. In order to advance the research, it is necessary to clarify the editing process of the original work and the bibliographies of succeeding editions. Due to the complicated nature of the work itself, with a substantial number of revisions in a huge number of different editions with editorial notes of various kinds, the bibliographic accounts in review articles and those editorial notes to date are far less satisfactory only to give sporadic pieces of its bibliography. In this study, those pieces of bibliographic information are to be put together in order to make, to the greatest feasible extent, one whole picture of the work.

1．はじめに

> The first edition of the book—a work destined, from the quiet simplicity of its style, the calm benevolence of its spirit, and the close and accurate observation evinced in almost every page, to become more extensively popular than any other publication on a similar subject that has yet appeared—was given to the world in quarto, in 1789, four years before the death of its amiable author. (Bennett 1837: xiii-xiv)（『セルボーンの博物誌』の初版は、平静簡素なその文体と穏やかな慈愛で満ちたその魂、そしてほぼすべてのページに描かれる綿密で正確な観察、それらゆえにこれまで出版された同様の主題を扱う他のどの出版物よりも広く人気を博す運命にある、穏和な著者が没する4年前の1789 年に四折判で世に送り出された書物である。—筆者訳）

ⓒ高知大学人文社会科学部　人文社会科学科　国際社会コース

* 高知大学名誉教授、宮崎大学名誉教授　E-mail: g.murahata@kochi-u.ac.jp

本研究の目的は、「英国博物誌の父 'the Father of English Natural History'」(Buckland 1876, vols. II: 3) と称される Gilbert White（1720-1793; 以下、ホワイトと呼ぶ）が著した *The Natural History of Selborne*（以下、『セルボーン』と呼ぶ）の書誌の概要を詳らかにすることである。本研究は、西谷退三訳／ギルバート・ホワイト著『セルボーンの博物誌』（初版、1958年刊）研究の一環であり、本稿ではその研究基盤を構築するための前段的研究として原著の史的書誌（historical bibliography）および体系的書誌（systematic bibliography）の両面を詳細に検討しようとするものである。

ホワイト（図1）が著した『セルボーン』（1789年初版）は、Izaak Walton の *The Complete Angler*『釣魚大全』(1653年初版) とともに英国自然文学の古典的名著とされ、初版出版以来、絶大な人気を博し、夥しい数の各種刊本が出版されてきた。作家であり鳥類学者でもある W. H. Hudson（1915）は、その著書 *Birds and Man* の中で『セルボーン』を次のように評している。

図1 1914年に見つかったホワイトの肖像画
(Martin 1934)

> Why does this "little cockle-shell of a book," as one of them has lately called it, come gaily down to us over a sea full of waves, where so many brave barks have foundered? The style is sweet and clear, but a book cannot live merely because it is well written. It is chock-full of facts; but the facts have been tested and sifted, and all that were worth keeping are to be found incorporated in scores of standard works on natural history. I would humbly suggest that there is no mystery at all about it; that the personality of the author is the principal charm of the Letters, for in spite of his modesty and extreme reticence his spirit shines in every page; that the world will not willingly let this small book die, not only because it is small, and well written, and full of interesting matter, but chiefly because it is a very delightful human document. (p. 301)（この「灰貝船のような小本」、ある人が最近そう呼んだものだが、次から次へと打ち寄せる波の海原でこれほど多くの帆船が水没しているにもかかわらず、この本はなぜ私たちのところまで嬉々としてやって来るのか。文体は爽澄である。だが、ただ単によく書けているからといってその書に生命があるのではない。この本には事実がぎっしり詰まっているが、それらは皆吟味され篩にかけられ、残す価値のあるもの全てが博物誌に関する作品の中に取り上げられているのである。卑見を申し上げれば、このことに私は何の不思議も感じていない。著者の人格こそが書信集たる本書の主たる魅力となっている。なぜなら、ホワイトの謙虚さと極度の寡黙さにも関わらず、彼の精神はどのページにも輝いているからである。世間は決してこのささやかな書の命を尽きさせることはないだろう。なぜかと言えば、この書が小さく、よく書けていて、なおかつ興味深い内容で満ちているからというだけではない。この書を不朽ならしめる主たる理由は、この書が実に心嬉しい人間の記録だからである。―筆者訳）

またある人は、"He has left behind him one of the most delightful works in the English lan-

guage, a work will be read as long as that language lasts." (Woodward c1920: iii)（ホワイトは、英語で書かれた最も魅力的な著作の1つを遺したが、それは英語が存在する限り読み継がれることだろう。―筆者訳）と本書の普遍的価値を暗示し、またマートン・カレッジの当時の学長 Dr. Scrope Beardmore はホワイトの姪に宛てた書信の中で、"Your uncle has sent into the world a publication with nothing to call attention to it but an advertisement or two in the newspapers; but depend upon it the time will come when very few who buy books will be without it." (Jesse & Jardine 1851: xi-xii)（貴女の叔父は、世の注意を喚起することなく、ただ新聞に1～2の広告を掲載しただけで1つの出版物を世に送り出した。だが間違いなく、本を買う人であればそれを手にしない人などいない時代がいずれはくるだろう。―筆者訳）と、その行く末を予見している。さらに、同書の編註者の1人である Allen (1900) は、序文で『セルボーン』の真の価値を次のように述べている。

> … the value of White's work is universal and permanent. His method is even more important than his results. He teaches one how to observe; he shows us by an object-lesson of patience and watchfulness how we ought to proceed in the investigation of nature. (p. xxxv)（ホワイトの著作の価値は普遍的、永続的である。彼が取る方法はその結果よりも重要だからである。彼は私たちにどのように自然を観察すべきかを教えてくれる。それには忍耐と注意深さが必要であることを彼自身の体験を通して、私たちが自然の研究にどう向き合えば良いかを教えてくれるのである。―筆者訳）

ホワイトのこのような自然観察の方法に影響を受けて野鳥の習性を観察、記録した自然科学者が、『種の起源』を著したチャールズ・ダーウィンである。ダーウィンは、その『自伝』（ノラ・バーロウ編／八杉・江上訳（1972））の中で学生時代を回想して次のように述べている。

> ホワイト White の『セルボーン』Selborne を読んでからは、鳥の習性を観察することに非常な喜びをおぼえ、そのことについてノートをつくりさえした。私は単純に、どうして紳士がみな鳥類学者にならなかったのかと不思議がったのを、おぼえている。（p. 27）

このようにホワイトの『セルボーン』は、文学界にも自然科学界にも大きな影響を与え、好評を博すがゆえに出版される各種刊本の数は1789年初版から1800年代末まですでに73種 (Martin 1896: 121)、あるいは80種 (Sharpe 1900, vol. I: xxi) が刊行され、西谷退三訳の『セルボーンの博物誌』が出版された1950年代までには150種（西谷 1958: iii）、1990年初期までには重版を含めれば300種 (Davidson-Houston 1993: book sleeve) を超えると言われているのである。この数字は本書の価値がいかに永続的、普遍的であるかの証左である。

しかしその一方で、『セルボーン』1798年初版の翻刻版 (1972) の編者が、'Introductory note' において、"The bibliography of *The Natural History* is very complicated, largely due to the immense popularity of the work and the consequent proliferation of editions, but also because of the variation of the contents between different editions." と述べているように、『セルボーン』は出版以来、絶大な人気を博しそれに伴う諸版の急増により版ごとに内容が異なる点もあり、その文献書誌は極めて複雑なのである。さらに、元来本書は見かけ上はホワイトが高名な動物学者と博物

学者の2氏に20年以上にわたって宛てた私的書信を整理補筆して1つの書物にしたものである。しばしば指摘されているように、そこには実際には発送されていない見せかけの書信が編入されていたり、書信の一部を削除したり、補追したり、修正したり、転用したりするなど、書全体の構成が不透明な部分が多く、その上、後続刊本では採録文章や註の付し方やその量、内容にも大きな違いがある。このように、『セルボーン』の書誌には多様な課題が内在しているのである。

『セルボーン』の刊行以来、この著書に触れた論考や各種編註本の序文や註などで、その書誌情報について検討したものはこれまでにいくつか確認できる。例えば、市河 (1940) の 'Introduction: VI. The Natural History of Selborne' では、

> 本書の内容は書翰の形式で二つの部分から成る。第一部四十四通は、著者が1767年から1776年まで Thomas Pennant に書き送った通信、第二部六十六通は、1769年から1787年まで彼が Daines Barrington に宛てた手紙の中から、適當と思はれるものを選擇して一卷の書物に纏めたのである。後から書き足したり、削ったり、日附けを變更したりした箇所はあるが、ほとんど全部實際に書いた手紙をそのまゝ採録したのである。(p. xlix)

とあって、市河 (1940) は、1つの書物として出版するために様々な形で編集、加工していることを認めるも、ほとんどが実際に書いた手紙をそのまま採録したとしている。果たしてそれは真実であろうか。いずれにしても、詳細な書誌的情報はなお不明のままである。

このように、本書書誌の複雑さゆえに、それらの論考等（生田 2002; 門井 2008; 河野 1997; Martin c1897, 1934; 高瀬 1937; 竹友 1928; 戸川 1932）の多くは一部の情報を扱った散在的なもので、どれも包括的な記述にはほど遠い。そこで本稿では、これらの欠点を補うべく、『セルボーン』の初版からその後続刊本で散発的に記されている史的、体系的書誌情報を統合し、可能な限りその全容を明らかにしようとするものである。

2．研究の方法

2.1 研究の視座

本稿の目的は、『セルボーン』の書誌を明らかにすることであるが、研究の視座を明確にするため、そもそも書誌とはどのようなものであるかについてまず検討したい。Prytherch (2005: 66) は、文献研究を進めるにあたっての書誌について、史的書誌と体系的書誌の2つに分類している。前者は、主として初版刊行以降の出版歴、すなわち、どのような版がこれまで出版されてきたのか、その出版過程等を時間軸に沿って歴史的な視点から記述する書誌である。後者は、当該出版物の具体的な内容などに関わる情報を詳細に記述する意味での書誌である。前述したように、本書の各種刊本間には内容面でのかなりの異同が見られる。特にホワイトが私的書信の形で発送した文章を1つの書にまとめたという特殊性から、後者の意味での書誌は極めて重要な位置を占める。本研究調査では、この Prythirch (2005) の書誌に関する規定、すなわち史的書誌及び体系的書誌を視座として研究を進める。

2.2 研究の内容と対象

2.2.1 研究の内容

まず、史的書誌については、1789年初版の詳細を明らかにした上で、以降、1920年代末までに出版された『セルボーン』の各種刊本等の構成や特徴を時間軸に沿って分析していく。

一方、体系的書誌については、1) 2氏に宛てた書信の発信日付と発信場所、2)『セルボーン』初版において改変された発信年月日、3) 特筆すべき書誌事項を含む書信、4) 書信の改変・修正、5) 各種刊本における註の付し方と内容、6) 誤植等のミス、これら6項目に沿って研究を進めていく。

2.2.2 研究対象とする文献資料

本研究調査では、主として以下の『セルボーン』の刊本等を調査の対象とする。

1) 西谷退三旧蔵の、1813年本をはじめとする各種『セルボーン』刊本（高知県佐川町・青山文庫内「西谷文庫」所蔵）
2) 1789年初版から1800年代最末期までと1920年代末までの『セルボーン』各刊本の分析的書誌を記述した Martin[1] (1896)（青山文庫所蔵）および Martin (1934)（筆者私蔵）
3) 筆者私蔵の1789年初版本（1972年 Scolar Press 刊行の復刻版）及び1802年第2版を含む刊本
4) その他、『セルボーン』に関する論考等

以上の調査資料のうち、史的書誌の情報については、Martin (1896, 1934) による各刊本の書誌レヴューを軸に、一方、体系的書誌については、それに関連する情報を散在的ながら取り上げている Bennett (1837)、Jardine (1853)、Bell (1877)、Sharpe (1900) や Allen (1900)、Nicholson (1929) などの各種刊本を中心に、それぞれの視座から『セルボーン』書誌の全体像を探っていくことにする。

3．研究の結果

3.1 『セルボーン』の史的書誌

この節では、まず、初版の体系的書誌情報を整理した上で、その後に刊行された各種刊本を時間軸にそって、その概要や特徴、構成等を見ていくことにする。

3.1.1 『セルボーン』初版本の体系的書誌

以下では、まず1789年版をオリジナル・サイズとともに内容も忠実に複製 (Facsimile) した Scolar Press 出版復刻本（1972年刊）をもとに1789年初版の体系的書誌を示す。そして必要に応じて補足していく。

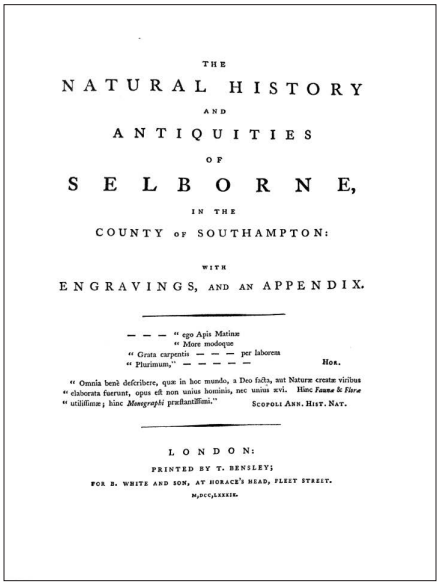
＜1789年初版の体系的書誌＞

1. 書　名 (Title Page)　*The Natural History and Antiquities of Selborne, In The County of Southampton.*

[1] Edward A. Martin は、ホワイトの弟Benjamin の孫にあたる (Martin 1934: 16)。

2. 著者 (Author) Gil. White
3. 印刷 (Printing) London: T. Bensley
4. 出版 (Publisher) B. White and Son
5. 刊行年 (Year of Publication) 1789
6. 判サイズ (Book Size) 4to（quarto：四折判）縦263mm ×横204mm ×厚さ48mm
7. 大口絵（折込 Large Folding Frontispiece） 縦325mm × 横475mm North East View of Selborne, from Short Lythe. Published Nov. 1. 1788, as the Act directs, by B. White & Son.
8. 構成

- Title (The Natural History and Antiquities of Selborne, In the County of Southampton: With Engravings, and Appendix. — — — "ego Apis Matinæ "More modoque "Grata carpentis — — — per laborem "Plurimum, — — — — — Hor. "Omnia benè deſcribere, quæ in hoc mundo, a Deo factа, aut Naturæ creatæ viribus "elaborate fuerunt, opus eſt non unius hominis, nec unius ævi. Hinc *Faunæ & Floræ* "utiliſſimæ; hinc Monographi præſtantiſſimi." Scopoli Ann. Hist. Nat. London: Printed by T. Bensley; For B. White and Son, at Horace's Head, Fleet Street. M,DCC,LXXXIX.) (1p).
- Inner Title Page (The Natural History of Selborne.（挿絵）Homer と Cicero の引用 Τρηχέι, αλλ' αΥαθη κδροτροΦος. δτι εγωγε 'Ης γαιης δυναμχι γλυκερωτερον αλλο ιδεσθαι. Homeri Odyſſ. Tota Denique noſtra illa aſpera, & montuoſ, & fidelis, & ſimplex, & fautrix ſuorum regio. Cicero Orat. pro Cu. Plancio.) (p. i).
- Advertisement. (pp. iii-v)（末尾：Selborne, January 1ſt, 1788. GIL. WHITE.）
- The Natural History of Selborne (pp. 1-305).
- The Antiquities of Selborne, in the County of Southampton (pp. 307-430).
- Appendix [in Latin]: Number I (pp. 431-433); Number II (pp. 434-438); Number III (pp. 439-462); Number IV (pp. 463-465); Number V (pp. 466-468).
- Index (12p).
- List of the Plates to the History of Selborne, from the Drawings of S. H. Grimm. (1p)
- Errata in the History of Selborne. (1p).


THE
NATURAL HISTORY
AND
ANTIQUITIES
OF
SELBORNE,
IN THE
COUNTY OF SOUTHAMPTON:
WITH
ENGRAVINGS, AND AN APPENDIX.

— — — "ego Apis Matinæ
"More modoque
"Grata carpentis — — — per laborem
"Plurimum," — — — — — Hor.

"Omnia benè deſcribere, quæ in hoc mundo, a Deo factа, aut Naturæ creatæ viribus
"elaborata fuerunt, opus eſt non unius hominis, nec unius ævi. Hinc *Faunæ & Floræ*
"utiliſſimæ; hinc *Monographi* præſtantiſſimi." Scopoli Ann. Hist. Nat.

LONDON:
PRINTED BY T. BENSLEY;
FOR B. WHITE AND SON, AT HORACE'S HEAD, FLEET STREET.
M,DCC,LXXXIX.

図2『セルボーン』1789年初版の扉 (Title Page)

9. 註 (Notes) 上付の小文字 a から z を繰り返し使用している。各ページに付す脚注（footnote）方式をとっている。"This ſoil produces good wheat and clover." のように、各書信に対して1~2程度の非常にコンパクトで文字通り補足的な内容の註が多い。

活字 (Typography) 別字体や合字、斜体などを使用している。

ノンブルと背丁 (Pagination and Signature) ページ番号はアラビヤ数字を使用し背丁記号も付している。

1789年初版では、扉 (Title Page)（図2)、内扉 (Inner Title Page) にも著者名は記されず、p. iii の ‘Advertisement’ 末尾に至って初めて ‘GIL. WHITE’ と著者名が登場する。しかも、‘Gilbert’ と洗礼名をスペルアウトすることなく、‘GIL.’ と短縮名を使用する念の入れ様である。名利を欲しない White の「謙譲で控えめな性格」（西谷 1958: vi）がここによく現れている。なお、ホワイト没2年後の1795年に Dr. John Aikin 氏の編集でホワイトの甥 John White（ホワイトの弟 Benjamin の子）[2]が出版した *A Naturalist's Calendar, With Observations in Various Branches of Natural History; Extracted from the Papers of the Late Rev. Gilbert White, M.A. of Selborne, Hampshire, Senior Fellow of Oriel College, Oxford.* において初めて、‘Gilbert White’ の著者名がフルネームで扉に記されている。ついでながら、ホワイトは、本書に採録された観察記録をもとに2氏宛に書信の形で書き送ったものである。また著者名については、『セルボーン』の第2版として甥 John White が出版した1802年版の扉にも ‘The Works, In Natural History, Of The Late Rev. Gilbert White, A.M.’ と著者名 ‘Gilbert White’ が明記されている。

この1789年初版を出版したのはロンドンで出版業を営んでいた弟の Benjamin である。「出版 (Publisher)」にある ‘B. White’ はこの人物を指している。

扉左に折込み挿入されている大口絵について、絵左手の人物がホワイトだという者もいれば、右端だという者もいる (Martin 1896: 107-108)。

本書の内容について、第1部の The Natural History of Selborne は、前半部が Letter I. To Thomas Pennant, Esquire. から Letter XLIV. To The Same. (pp. 1~114) で、後半部は Letter I. To The Honourable Daines Barrington から Letter LXV. To The Same. (pp. 115-305) で構成されている。日付のある最初のペナント氏宛書信は Letter X ‘Auguſt 4, 1767.’ であり、最後の書信は Letter XLIV ‘Nov. 30, 1780’ である。また、日付の付された最初のバリントン氏宛書信は Letter I ‘June 30, 1769’ で、最後が Letter LXV ‘June 25, 1787’ である。なお、バリントン氏宛の Letter LXI という書信が2信あり、その書信以降の番号が誤っているため、最終の書信番号は Letter LXV ではなく Letter LXVI が正しい。Martin (1896) も、この最後の書信番号からバリントン氏宛書信は65信と誤って見ている（p. 108)。1813年の John White 刊本にも同じ誤りが見られる。一部を除くほとんどの後続刊本では修正され Letter LXVI と正しい。

2氏に宛てた書信の日付に注目したい。表1は、ホワイトがペナント氏及びバリントン氏の両氏に送ったとされる書信の内訳を表している。1767年から1787年までの間に発信された書信、それぞれ44信と66信、計110信である。ペナント氏宛の44信の書信のうち11信（表1の西暦欄 n.d. の書信）の発信

[2] John White という名の親族は複数いたために多少の混乱が見られる。まず、ホワイトの父はJohn White (1688-1758) である。そしてJohnという弟も2人いたが1人は早世し (29 Sept.,1721-1721 Dec.,1721)、もう1人 (1727-1781) もホワイトよりも早く他界している。そしてJohnという甥もいた。その甥John White (1765-1855) がロンドンで出版業を営みホワイトの『セルボーン』初版を刊行し、ホワイトの没後にその旧家屋等を相続し子息に出版業を譲った弟Benjamin White (1725-1794) の子である。ここでというJohn Whiteというのはこの甥のことを指す。1895年刊にBlackie & Sonから出た『セルボーン』の序文で、“To an edition of his ‘Selborne’ published in 1802, his brother John appended a short biographical sketch of the author …” (p. 7) とあって、ホワイトの弟John がホワイトの小伝を補追したとなっているが、いずれの弟Johnも他界してからすでに10年以上も経過しているのでそれはあり得ない（Holt-White (1901, vol. II) 巻末にある折込のホワイト家系図を参照)。

表1 ホワイトが2氏に送った書信の内訳

西暦	宛先と書信数		
	ペナント氏宛	バリントン氏宛	計
1767	3		3
1768	9		9
1769	5	2	7
1770	7	5	12
1771	4	2	6
1772		3	3
1773	2	4	6
1774	1	5	6
1775	1	5	6
1776		5	5
1777		2	2
1778		7	7
1779		1	1
1780	1	1	2
1781		3	3
1787		1	1
n.d.	11	20	31
Total	44	66	110

注：n.d. は、年月日表示のない書信

年月日が記されておらず、バリントン氏宛のものも66信のうち20信、総計31信に発信年月日が記されていない。

また、時系列的に見れば、ペナント氏宛の書信が一番古く、1767年に3信を発信している。一方、バリントン氏宛の書信は1769年の2信が最も古い。このように、初版の第一部をなすペナント氏宛とバリントン氏宛ての書信は、発送した時期は多少異なるものの、同時期に発送したものも多い。一番多いのは1770年で計12信である。

バリントン氏宛の最後の書信の後に内扉 'The Antiquities of Selborne, In the County of Southampton'（挿絵）(p. 307) があり、第2部 'The Antiquities of Selborne'（セルボーンの古代事物）と続く。この部の文章も書信調で書き上げられているが、すべて日付のない書信、Letter I から Letter XXVI (pp. 309-428) の26信である。本書が有名になったのは第1部の「セルボーンの博物誌」であるため、この第2部は後続の刊本において削除されることもある。なお、'Antiquities' 末尾に1つの短編補遺が採録されている。'*More* Particulars *reſpecting the* Old Family Tortoise, *omitted in the* Natural Hiſtory.' (pp. 427-428) である。これは、亀に関する文章で、1802年本とそれ以降の多くの刊本ではバリントン氏宛第50信末に採録されている。その Appendix に続くのは、Index (12p) と List Of the Plates To The History of Selborne, From The Drawings Of S. H. Grimm. (1p) である。本書では以下のように、9つの図が挿入されている。

PlI: 扉右の折込図；PlII: 内扉の図；PlIII: Mytilus, Crista Galli.（p. 6-7の間）；PlIV: HCharadrius, Himantapus（p. 258-p. 259の間）；PlV: [内扉 The Antiquities of Selborne, in the County of Southampton. (Figure) — — — JUVAT IRE — — — Desertosque Videre Locos — — — Virgil.] (p. 308)；PlVI: South View of Selborne Church.（p. 314-p. 315 の間）；

PlVII: North View of Selborne Church.（p. 322-p. 323 の間）；PlVIII: Temple, in the Parish of Selborne.（p. 342-p. 343 の間）；PlIX: The Pleystow, vulg. the Plestor（p. 344-p. 345 の間）

最後に、Errata In The History of Selborne. (1p)（18の誤植・ミス）のリストがある。このリスト中にある具体例については後述する。

なお、初版では、語尾以外の ‘s’ は、別字体の ‘ſ’ (long s) を用いている。例えば、‘consist’ (p. iii) は ‘conſiſt’ と表記されている。また、‘fi’ ‘fl’ ‘ct’ などの文字連続は文字の不自然な重なりを避けるため、それぞれに応じた合字（ligature）‘ﬁ’ ‘ﬂ’ ‘ct’を使用している。さらに、直接引用を表示する場合、現代では、“Dr. Hales faith, That the warmth of the earth, at …” のように、たとえ引用部分数行にまたがっても1つのダブルクオーテーションで括るが、本書では “That the warmth of the earth, at “ſome depth … “of the weather… “viz. Nov. 29 … ” のように全行の先頭に “ 符号を付している。また、‘the county of *Hampſhire’ ‘Brit. Zool.’ ‘January’ ‘ſwift’ ‘mus minimus’* のように固有名詞や書名、月の名前、動植物名、学名などにはイタリック体を用いている。

ノンブルは、各ページの右上にアラビア数字で示している。また、本書の印刷は4to（四折判）方式をとっており、折順を示すため2ページ目と4ページ目の下中央に ‘F’ ‘F2’ のようにアルファベットとアラビア数字の組み合わせで背丁を付している。アルファベットの2巡目は、‘Qq’ ‘Qq2’ のように、小文字を併記している。さらに、ページの乱丁を防ぐため、各ページの右下に ‘I forgot’ (p. 31) のように次ページ冒頭の1語か2語を印字している。

3.1.2　初版刊行に至るまでの経緯

前節では1789年初版の書誌情報を検討したが、本節では、その初版出版に至るまでの経緯について時間軸の沿ってみていくことにする。まず前置きしておかなければならないのは、ホワイトは当初から本書の出版を計画していた訳ではないことである。まずはペナント氏との文通が始まり、その2年後にバリントン氏との文通も始まる。以下、初版出版に至るまでの経緯である。

1767年	ペナント氏との文通が始まる。
1767年8月4日	ペナント氏宛に最初の書信を送る（ペナント氏宛第10信）。
1769年5月	バリントン氏とロンドンで面会する。
1769年6月30日	バリントン氏宛に最初の書信を送る（バリントン氏宛第1信）。
1770年4月12日	この日までには、バリントン氏からセルボーン地方の動物に関する記録を1つの書にまとめて出版することを勧められていた。

このように、1769年5月から1770年4月の間でバリントン氏と書信のやり取りをする中で書信を整理して1つの書にまとめて出版することを勧められたのである。しかしながら、バリントン氏によって『セルボーン』の出版を勧められたとはいえ、ホワイトは、バリントン氏が、自分の拙い能力を過信していているのではないか、自分のごとき孤立無援の人間が自分の観察経験によって独自の『セルボーン』を書くのは決して容易ではない、などとこのような大業に慎重な姿勢を示している。

1770年4月12日　When we meet, I shall be glad to have some conversation with you concerning the proposal you make of my drawing up an account of the animals in this neighbourhood. Your partiality towards my small abilities persuades you, I fear, that I am able to do

more than is in my power: for it is no small undertaking for a man unsupported and alone to begin a natural history from his own autopsia! Though there is endless room for observation in the field of nature, which is boundless, yet investigation (where a man endeavours to be sure of his facts) can make but slow progress; and all that one could collect in many years would go into a very narrow compass. (Miall & Fowler 1901: 105)

このように、ホワイトの謙譲の姿勢がよく現れているが、1年後、バリントン氏宛第9信の原本の、本書では削除された箇所には、

1771年2月12日　In obedience to yr. repeated injunctions I have begun to throw my thoughts into a little order that I may reduce them into the form of an *annus-historico-naturalis* comprising the nat. history of my native place. As I never dreamed 'til very lately of composing anything of this sort for the public inspection, I enter on the business with great diffidence, suspecting that my observations will be deemed too minute and trifling. However if I ever finish it I shall submit it to yr. better judgment. … (Nicholson 1929: 30)

とあって、世に出す自信がないながらもバリントン氏の度重なる勧めに応じて出版する決意をかためていく。そして、自分の観察がとるに足らないものと思われるだろうが、完成したならば同氏にぜひ見てもらいたいと心境を述べている。そして、その数ヶ月後、『セルボーン』では削除されたペナント氏宛第35信の一節で、

1771年7月19 日　As to any publication of my own, I look upon it with great diffidence, finding that I ought to have begun it twenty years ago. But if I was to attempt anything it should be somewhat of a Nat[ural] history of my native parish, an *annus historico-naturalis* comprising a journal for one whole year, and illustrated with large notes and observations. (Holt-White 1901: 201)

と述べ、1つの書にするのであれば20年前から取り組むべきであったと後悔するも、書にするのであれば当地セルボーン教区の博物誌のようなもので、1年を通した観察をもとに多くの図と記録から構成される書が良いであろうと抱負を述べている[3]。なお、前節の書誌でも触れたが、実際本書に挿絵したのは僅か9図で、しかも鳥類などのものは一切なく博物図と言えるものは唯一貝の化石図 (PlIII: Mytilus, Crista Galli.) だけである。

そして転機が訪れる。1774年の2月と3月にホワイトがロンドンの Royal Society（王立学士会）において「ツバメ」について発表したことである。発表内容は、バリントン氏宛書信、1774年1月29日付同第18信（ツバメ）、1774年2月26日付第20信（ショウドウツバメ）、1774年9月28日付第21信（アマツバメ）に再録されている。Nicholson (1929) によれば、

[3] ホワイトが、2氏に送った書信を編集して1つの書籍にする決意を固めた際には、書信原本は2氏の好意によりホワイトに戻されたようである (Bell 1877, vol. I: l)。一時期、Bellがそれらを所有していたが現在は大英博物館の所蔵である。

Gilbert White's low opinion of the value of his own observations was gradually overcome by personal contact with famous naturalists of his time, whose faults, little noticed by the world, stood out sharply in the clearer Selborne atmosphere. The compliments of his correspondents, who could well afford them, and the reception given to his papers on the *Hirundines* read before the Royal Society in February and March, 1774, finally removed his hesitation. (p. 31)

と、当時の著名な博物学者との個人的な接触や、これら王立学士会での発表が大いに歓迎されたことから『セルボーン』出版に対するホワイトの躊躇は徐々に解消されていったとしている。

また、Martin (1934) によれば、最終的にホワイトに対して出版を説得したのは、王立学士会の会員 (Fellow of the Royal Society) で3番目の弟 Thomas White であったという (p. 3)。なお、この Thomas は、英国の総合雑誌である *Gentleman's Magazine* に本書の書評を掲載している。

そして時が経つにつれ徐々に Natural History の構想がかなり具体的になりつつあることを弟 John に宛てた書信で自信に満ちた様子でホワイトはこう書いている。

1774年4月　Out of all my journals I think I might collect matter enough, and such a series of incidents as might pretty well comprehend the Natural History of this district, especially as to the ornithological part; and I have moreover half a century of letters on the same subject, most of them very long; all which together (were they thought worthy to be seen) might make up a moderate volume. To these might be added some circumstances of the country, its most curious plants, its few antiquities; all which together might soon be moulded into a work, had I resolution and spirits enough to set about it. (Holt-White 1901, vol. I: 250)

ただし、この段階においてもなお鳥類の観察記録を中心とした Journal 形式を優先して、そこに比較的長い書信群を入れればある程度のボリュームのある本ができるとしている。なお、興味深いのは、バリントン氏から共著での『セルボーン』の出版を提案されていたようである。しかし、ホワイトは、"Mr. Barrington want me to join with him in a Nat: His: publication.; but it I publish at all, I shall come forth by myself." (Bell 1877, vol. I: l-li) と出版するのであれば単著で出したいと甥の Samuel Barker（ホワイトの妹 Anne の子）に宛てた1776年2月付書信に記している。その一方で、"My progress in Nat. Hist. is very slow indeed." (Holt-White 1901, vol. II: 59) と、遅れ気味の進捗状況を1780年12月7日に友人 Rev. R. Churton に伝えている。

バリントン氏宛の最後の書信（バリントン氏宛第66信）では、

1787年6月25日　When I first took the present work in hand I proposed to have added an *Annus Historico-naturalis,* or the Natural History of the Twelve Months of the Year; which would have comprised many incidents and occurrences that have not fallen in my way to be mentioned in my series of letters;— but, as Mr. *Aikin of Warrington* has lately published somewhat of this sort, and as the length of my correspondence has sufficiently put your patience to the test, I shall here take a respectful leave of you and natural history together. (Miall & Fowler 1901: 235-236)

とあって、自分が当初立てた計画内容（観察記録）に類似したものが最近 Mr. Aikin 氏によって出版されてしまい、また、バリントン氏との交信も永くなったので、この辺で同氏にも年来の博物学にもお暇したいと述べている。

その後、計画は多少なりとも進んでいたようで、以下の書信で『セルボーン』の出版は本格的な段階にあることがわかる。しかし、本書に寄せた宣伝文には、'Jan. 1st, 1788' とあるにも関わらず、実際に『セルボーン』が出版されたのは翌年1789年の春である。このことからも、この段階においてさえ、資料整理には相当時間がかかっていたことがわかる。甥の S. Barker に宛てた書信の一部である。

> 1788年1月8日　I have been very busy of late, and have at length put my last hand to my Nat: Hist: and Antiquities of this parish. However, I am still employed in making an Index …… My work will be well got up, with a good type and on good paper, and will be embellished with several engravings. It has been in the press some time, and is to come out in the spring. (Bell 1877, vol. I: lii)

そして非常に興味深いのは、Ward & Walter (1913) はその典拠は示していないものの、

> Barrington, in 1770, suggested the publication of White's observations; but, although White thought favourably of the advice, he was diffident and did not prepare his materials for press until January, 1788. Even then, there was more delay, so the book was not published until 1789. (p. 305)

と述べて、1770年にバリントン氏から出版を勧められてそれを前向きに受け止めながらも、ホワイトが実際に起稿の準備を始めたのは 1788年1月、すなわち出版の前年であり、それでもなお進捗状況は芳しくなかったとしていることである。

ホワイトの筆が決して速くはなかったことはこれまで指摘されてはいたが、出版の前年になってようやく資料整理を始めたという Ward & Walter (1913) のこの指摘がもし事実であれば、ホワイトは『セルボーン』をごく短期間のうちに成稿したことになり、彼の執筆活動は "in an extremely leisurely way"「非常にゆっくりしていた」(Miall & Fowler 1901: xxi) とする通説は修正されなければならないかもしれない。

3.1.3　初版以降に出版された『セルボーン』各種刊本の概要と構成

本節では、主に Martin (1896, 1934) を参考に、西谷文庫本や筆者私蔵本を資料にしながら、1920年代末まで出版された主な刊本とその書誌概要を示していくことにする。ただし、自著がマドラス（インド）、フランス、スイス、中国などに広がっていることをホワイトは歓喜していたという記録が王立協会フェローの Robert Marsham に宛てた書信 (Holt-White 1901, vol. II: p. 244) に見えるが、それらの刊本についてはここでは除外する。以下、各刊本の主要部は太字で、特徴的な内容には下線を施した。なお、書名尾の「†」は西谷文庫所蔵本を、「#」は筆者私蔵本をそれぞれ示す。

1792年

White's Beyträge zur Naturgeschichte von England. Berlin（ドイツ、ベルリン）でドイツ語版が刊行される。訳者は Friedrich Albrecht Anton **Meyer** である。ホワイトの生前に出版された最初の外国語訳本である。原著の内容を無方針に変更した短縮版で、不完全、不正確で抜粋部分を漠然と繋ぎ合わせるなどしたために評価は決して高くない。未見のため、構成等に関する書誌情報は不明である。16mo（16折判）168p。

1795年

A Naturalist's Calendar, With Observations in Various Branches of Natural History; Extracted from the Papers.[#] ホワイト没 (1793) 後、Dr. John Aikin が、ホワイトが生前に記録していた未発表の観察日誌や記録から抜粋したものをホワイトの弟 Benjamin とその子 John が London, B. & J. White, Horace's Head という出版社名で刊行したものである。いわゆる『セルボーン』刊本の1つではないが、後の多くの刊本に採録された 'Calendar' と 'Observations' を初めて公刊した重要な書物であるためここで取り上げた。

Aikin 氏による興味深い 'Advertisement' がある。採録した文書の多くは当初ホワイトが博物誌の一部として出版しようとしたものであるが、Dr. Aikin 氏が類書を出版したことでホワイトは自著に採録するのを断念したものである。それが奇しくも同氏らの手によってホワイトの没後に1つの書物として出版された。交雑種鳥のカラー挿絵が特徴的で、Martin (1934: 99) では p. 65の対面ページに挿入されているとしているが、筆者私蔵本では扉の対面ページにある。初版と同様に、語尾以外の 's' は 'ſ' (long s) を用いている。8vo（octavo, eightvo：8折判）176p。

Title Page (p. i); Advertisement (pp. iii-iv); **<u>The Naturalist's Calendar (pp. 3-53); Observations on Various Parts of Nature</u>** (pp. 53-170); Table of Contents (pp. 171-175); [Title Page of the First Edition] (p. 176).

1802年

The Works in Natural History of the Late Rev. G. White, A.M., Follow of Oriel College, Oxford, Comprising the Natural History of Selborne, The Naturalist's Calendar, And Miscellaneous Observations, Extracted from His Papers.[#] 甥 John White（弟 Benjamin の子）により刊行され第2版である。1789年初版が品薄で高価になり需要を満たすために刊行された (Jardine 1833: iv)。'Antiquities' を削除するもその代わりに、ホワイト没後の1795年に John **Aikin** によって取り出された Calendar' に William **Markwick** が更に補追した。初版の 'Antiquities' 末尾の '*More* Particulars *reſpecting the* Old Family Tortoise, *omitted in the* Natural Hiſtory' はバリントン氏宛第50信末 (vol. II: 44-51) に編入されている。John White (J. W.) の手になるホワイト小伝が巻頭の 'Advertisement' の末尾に見られる。Martin (1934) は、Gilbert の弟 John は1781年に死亡しているので、この刊本を出版して小伝を書いたのはこの John White ではなく弟 Benjamin の子息の John であるとしているが (p. 157)、他の刊本では多少の混乱が見える。このホワイト小伝と 'A Comparative View' 及び 'Observations' を 'Natural History' とともに採録しているのは、この第2版が最初であり後発刊本に大きな影響を与えた刊本である。なお、ここまでの各版では 's' の文字に 'ſ' (long s) 及び合字もそのまま継承している。2巻本。8vo（8折判）vol. I: 392p, vol. II: 300p。

<Vol. I>

Title Page (p. i); Advertisement [Biographical Records of the Author Written by J. W. 含む] (p. iii-viii); **The Natural History of Selborne: Letters to Pennant I – XL (pp. 1-392)**.

<Vol. II>

Title Page (p. i); **The Natural History of Selborne: Letters to Pennant XLI – XLIV, to Barrington I – LXVI (pp. 1-119)**; A Comparative View of the Naturalist's Calendar, as Kept at Selborne, in Hampshire, by the Late Rev. Gilbert White, M.A. and at Catsfield near Battle, in Sussex, by William Markwick, Esq. F. L. S. From the Year 1768 to the Year 1793 (pp. 121-156); Observations on Various Parts of Nature. From Mr. White's MSS. with Remarks by Mr. Markwick. (pp. 157-285); Index (pp. 287-300); Directions for placing the Plates (p. 300).

1813年

The Natural History and Antiquities of Selborne, In the County of Southampton, To Which are Added, The Naturalist's Calendar, Observations on Various Parts of Nature, And Poems. † Rev. John **Mitford** 本（Advertisement は John White）が White, Cochrane & Co. など8社共同で出版される。巻末 (pp. 543-548) に Mitford による註がある。'Antiquities' を復活させ、かつ 'Naturalist's Calendar' と 'Poems'[4] を加えたため、大部で初期の刊本の中では最も完成度が高い。この版では 'ſ' (long s) ではなく新スタイルの 's' の文字を採用している。なお、この Mitford (1813) には、他に大型本や2巻本も刊行されている。4to（4折判）。588p。

Title Page (p. iii); [Biographical Records by J. W.] (pp. viii-ix); Advertisement. to the New Edition (p. x); Inner Title Page (p. xi); **The Natural History of Selborne (pp. 1-301); The Antiquities of Seoborne, in the County of Selborne (pp. 303-419)**; Appendix [in Latin], No. I (pp. 421-423), Number II (pp. pp. 424-428), Number III (pp. 429-451), Number IV (pp. 451-453), Number V (pp. 454-456); A Comparative View of the Naturalist's Calendar, as Kept of Selborne, in Hampshire, by the Late Rev. Gilbert White, M.A., and at Catsfield, near Battle, in Sussex, by William Markwick, ESQ., F.L.S., from the Year 1768, to the Year 1793 (pp. 457-473); Observations on Various Parts of Nature, from Mr. White's MSS. with Remarks by Mr. Markwick (pp. 475-559). [Observations on Some Passages in Mr. White's Natural History of Selborne (pp. 543-548).]; Poems (pp. 561-571); Index (pp. 573-587); List of the Plates (p. 588).

1822年

The Natural History of Selborne, To Which are Added, The Naturalist's Calendar, Miscellaneous Observations, and Poems. Rev. John **Mitford** の 註 と Dr. **Aikin** と Mr. **Markwick** の補追を採録したが、'Antiquities' を再度削除した2巻本である。11の出版社が関わり、White の名は消えている。8vo（8折判）vol. I: 350p, vol. II: 364p。

1825年

The Natural History of Selborne. To Which are Added, The Naturalist's Calendar, Miscellaneous Observations, And Poems. † London: C. & J. Rivington. 1802年第2版と同様に Dr. **Aikin** により整理されたもので、12の出版社名を連ねる2巻本である。内容は John White

[4] この詩の中の1つである 'Invitation to Selborne.' は、甥 Mr. Samuel Barker に送られた書信に記されたものである (Bell 1877, vol. I: xxviii; vol. II: 499-501)。

の ‘Advertisement’ のある Aikin & Markwick (1813) と同じである。8vo（8折判）vol. I: 351p, vol. II: 364p。

<Vol. I>

Title Page (p. iii); Advertisement (p. v-viii); **The Natural History of Selborne: Letters to Pennant I – LXIV, to Barrington I – XXIX (pp. 1-351)**.

<Vol. II>

Title Page (p. i); **The Natural History of Selborne: Letters to Barrington XXX – LXVI (pp. 1-160)**; A Comparative View of the Naturalist's Calendar, as Kept at Selborne, in Hampshire, by the Late Rev. Gilbert White, M.A. and at Catsfield near Battle, in Sussex, by William Markwick, Esq. F. L. S. From the Year 1768 to the Year 1793 (pp. 161-333). [Observations on Some Passages in Mr. White's Natural History of Selborne (307-316).]; Poems (pp. 335-346); Index (pp. 347-364).

1829年

The Natural History of Selborne, Observations on Various Parts of Nature and the Naturalist's Calendar. London: Constable & Co., and Hurst, Chance & Co. の刊本である。補追及び追註者として William **Jardine** の名前はあるが実際には Jardine は直接的には関与していない。Jardine (1853) の註によれば、Mr. Constable 氏が『雑録 (Miscellany)』出版のため Jardine に『セルボーン』の註を依頼したが、事情により Mr. Constable 氏による同著の出版は頓挫した (Jesse & Jardine 1851: 395; Martin 1896: 113)。‘Antiquities’ ‘Poems’ 他、博物誌にそぐわないものは削除されている。12mo（duodecimo：12折判）330p。

1833年

1) *The Natural History of Selborne, Observations on Various Parts of Nature, And the Naturalist's Calendar.*[#] London: Whittaker, Treacher, & Co. & Edinburgh: Waugh & Innsの新版が刊行される。Sir William **Jardine** 補追註による刊本で、本文は、2氏宛の書信がほぼ同時に同話題に関して書かれているという理由から、宛先順ではなく発送日付順に配列されている。Jardine (1829) と同様に、Jardine の名はあるが彼は直接関与していない。全ページの上部余白に ‘Village of Selborne’ ‘Streams’ など本文内容の要点を示す柱を配置している。また、バリントン氏宛第14信の冒頭第1段落のギリシャ語 ‘στοργή’ (p. 63) の直後に ‘or natural affection’ と英語訳を与えており、管見の及ぶ限りではこのように本文中に英語訳を施しているのは、この刊本と Jesse & Jardine (1851: 153) のみである。18mo（18折判）440p。

Title Page (p. i); Introduction (pp. iii-vii); [Advertisement] (p. viii); Poems: The Invitation to Selborne, etc. (pp. 1-8); **The Natural History of Selborne (pp. 9-332); Observations on Various Parts of Nature, from Mr. White's MSS. with Remarks by Mr. Markwick (pp. 333-406)**; A Comparative View of the Naturalist's Calendar, as Kept of Selborne, in Hampshire, by the Late Rev. Gilbert White, M.A., and at Catsfield, near Battle, in Sussex, by William Markwick, ESQ., F.L.S., from the Year 1768, to the Year 1793 (pp. 407-432); Index (pp. 433-440).

2) *The Natural History and Antiquities of Selborne, With Notes, by Several Eminent Naturalists. And an Enlargement of the Naturalists' Calendar.*[†] London: J. & A. Arch 他により刊行された包括的な刊本である。Professor John **Rennie** 主幹で、W. H. Herbert,

Robert Sweet らの著名な博物学者による註を付した刊本である。‘Antiquities’ と ‘Naturalist’s Calendar’ と ‘Observations’ そして ‘Poems’ を採録した、最初期の中で最も完成度の高い刊本である。Aikin & Markwick (1802) に採用の甥 John White の手になるホワイト小伝も再掲されている。8vo（8折判）562p。

Title Page (p. iii); Advertisement (pp. v-viii); Biographical Records of the Author (pp. ix-x). [署名 J. W. は削除]; Preface to This Edition (pp. xi-xii); **The Natural History of Selborne (pp. 1-330)**; Observations on Various Parts of Nature, from Mr. White's MSS. with Remarks by Mr. Markwick (pp. 331-399); Poems (pp. 401-410); Summary of the Weather (pp. 411-418); A Comparative View of the Naturalist's Calendar, as Kept of Selborne, in Hampshire, by the Late Rev. Gilbert White, M.A., and at Catsfield, near Battle, in Sussex, by William Markwick, ESQ., F.L.S., from the Year 1768, to the Year 1793 (pp. 419-448); **The Antiquities of Selborne, in the County of Southampton (pp. 449-554)**; Index (pp. 555-562).

1836年

The Natural History of Selborne, With its Antiquities, Naturalist's Calendar, &c. † Edward **Blyth** による編註本で、London: W. S. Orr & Co. の刊行である。極小ながら細密なイラストが多数挿入されている。Mr. Mudie によるセルボーン地方の記述を掲載している。初版の ‘Antiquities’ 末にある補追の文章は、多くの刊本ではバリントン氏宛第50信の末尾にあるが、この刊本では第66信末に掲載されている。奇数ページに要点を示す柱を配置している。12mo（12折判）418p。

Title Page; Inner Title Pate (p. 00); Advertisement (pp. i-iii). [by Edward Blyth.]; Selborne (pp. i-xix); **The Natural History of Selborne (pp. 1-260)**; Observations on Various Parts of Nature (pp. 261-305); A Summary of the Weather (pp. 306-312); A Comparative View of Nature (pp. 313-322); **The Antiquities of Selborne (pp. 323-405)**; [Poems] The Invitation to Selborne, etc. (pp. 407-412); Index to the Natural History (pp. 413-418); Index to the Antiquities (p. 418).

1837年

The Natural History and Antiquities of Selborne, With the Naturalist's Calendar, And Miscellaneous Observations, Extracted from His Papers. † # Edward Turner **Bennett** 編註本で、編註者が出版前に没したため弟 John Joseph **Bennett** により、London: J. & A. Arch 他により出版された刊本である。編註者の他、Bell, Owen, Yarrell, G. Daniell らが註を加えている。これまでに公刊されてきたすべてのホワイトの文章を採録し、また ‘Antiquites’ ‘Observations’ においては本書出版時に削除された箇所を［　］で復活させる工夫も施し、Rennie (1833) に匹敵する包括的な刊本である。E. T. Bennett の他、Rennie や Mr. Yerrell、Mitford、G. Daniell、Thomas Bell らによる、本文の量を凌ぐほどの註が見られる。The standard edition と呼ばれている。8vo（8折判）640p。

Title Page (p. i); Advertisement (p. v-vi); Biographical Records of the Author (pp. vii-viii); Preface to the Present Edition (pp. ix-xxiii); List of Illustrations (p. xxiv); **The Natural History of Selborne (pp. 1-400); A Naturalist's Calendar: With Observations in Various Branches of Natural History. Extracted from the Papers of the Rev. Gilbert White; by John Aikin, M. D. with Remarks by Mr. Markwick and Others (pp. 401-502)**. [Dr.

Aikin's Advertisement (pp. 403-404), The Naturalist's Calendar, as Kept at Selborne, in Hampshire, from the Year 1768, to the Year 1793: by the Rev. Gilbert White, M. A. to Which are Appended, Parallel Observations Made at Catsfield, near Battle, in Sussex. By William Markwick, ESQ. F. L. S. (pp. 405-423), Observations on Various Parts of Nature, from Mr. White's MSS. With Remarks, by Mr. Markwick and Others (pp. 425-502); Poems, Selected from the MSS. of the Rev. Gilbert White (pp. 503-512); **The Antiquities of Selborne, in the County of Southampton (pp. 513-629)**; Index (pp. 631-640).

1842年

The Natural History of Selborne. Arranged for Young Persons. S.P.C.K. (Society for Promoting Christian Knowledge) から出された若者向けの刊本である。18mo（18折判）328p。

1843年

1) *The Natural History of Selborne.*[†] Rev. Leonard **Jenyns** による編註本で、London: John Van Voorst の出版である。L. Jenyns は、ダーウィンと交流のあった人物である（p. 216 の註を参照）。'Antiquities' 'Poems' 'Observations' 'Naturalist's Calendar' を完全に不採録している。小さいながら細密な挿絵がある。全ページに要点を示す柱を配置している。16mo（16折判）399p。

Title Page (p. iii); Preface (pp. v-xii); List of Illustrations (pp. xv-xvi); **The Natural History of Selborne (pp. 1-384)**; Index (pp. 385-398); Preparing for Publication by the Editor of the Present Work. Observations and Notes in Various Branches of Natural History (p. 399).

2) *The Natural History of Selborne.* ニューヨークの Messrs. **Harper and Brother** から出されたアメリカ版の刊本である。52の小画を採録し、'Antiquities' 'Observations' 'Naturalist's Calendar' を不採録している。若年層向けの刊本で、書信番号は1789年初版と異なる。12mo（12折判）335p。

1851年

The Natural History and Antiquities of Selborne, With Observations on Various Parts of Nature, The Naturalist's Calendar.[#] London: Henry G. Bohn の刊行で、編註者は Edward **Jesse** により、出版人 Henry G. Bohn 氏の求めに応じて Sir William **Jardine** の手になる巻末補註も採用している。ホワイトの小伝（ホワイトが叔母や知人に宛てた書信を含む）を掲載し、また、1789年刊行の *Gentleman's Magazine* に掲載の弟 Thomas White による書評も再掲している。書信は発信年月日順に配列している。全ページに要点を示す柱を配置している。16mo（16折判）416p。

Title Page (p. i); List of Illustrations (pp. iii-iv); A Short Biography of the Rev. Gilbert White (pp. v-xxiv); Poems, Selected from the Manuscripts of the Rev. Gilbert White (pp. 1-9); **The Natural History of Selborne (pp. 11-302); Observations on Various Parts of Nature, from Mr. White's MSS. with Remarks by Mr. Markwick (pp. 303-366)**; A Comparative View of the Naturalist's Calendar, as Kept of Selborne, in Hampshire, by the Late Rev. Gilbert White, M.A., and at Catsfield, near Battle, in Sussex, by William Markwick, ESQ., F.L.S., from the Year 1768, to the Year 1793 (pp. 367-392); Supplementary Notes to White's Natural History of Selborne. by Sir W. Jardine, Bart (pp. 393-407) ([Preface] p. 395); Supplementary Notes, by or Communicated to the Editor (pp. 407-411); Index (pp. 412-416).

1853年

The Natural History and Antiquities of Selborne, With Observations on Various Parts of Nature, And the Naturalist's Calendar. † # Sir William **Jardine** 単独による編註刊本で、London: Nathaniel Cooke の出版である。既存の註にさらに新たに註を加えたもので、19世紀中葉の刊本の中で最も優れた、最も完成度の高い刊本である。価格を抑えて広く普及させることを企図した (p. xi) ためか、極小活字と小判挿絵を使用してコンパクトに仕上げている。1789年初版と Aikin & Markwick (1813) にのみ採用された折り込みのセルボーン景観図を縮小して採録している。珍しい誤謬をいくつか発生した刊本である。細密なイラストが多数挿入されている。16mo（16折判）342p。

Title Page; Inner Title Page (p. i); Advertisement to Original Edition (pp. iii-iv); Introductory Observations (pp. v-xiv); Contents (p. xv); List of Illustrations (pp. xvii-xviii); Plates (p. xviii); **The Natural History of Selborne (pp. 1-200)**; **The Antiquities of Selborne (pp. 201-265)**; Observations on Various Parts of Nature, from Mr. White's MSS. with Remarks by Mr. Markwick (pp. 267-312); A Comparative View of the Naturalist's Calendar, as Kept of Selborne, in Hampshire, by the Late Rev. Gilbert White, M.A., and at Catsfield, near Battle, in Sussex, by William Markwick, ESQ., F.L.S., from the Year 1768, to the Year 1793 (pp. 313-330); Poems, Selected from the MSS. of the Rev. Gilbert White (pp. 331-337); Index (pp. 339-342).

c1853年[5]

The Natural History of Selborne. † London: George Routledge and Sons の出版で、編註者は Rev. J. C. **Wood** である。理由は定かでないが、バリントン氏宛第32信 (XXII) が欠落しているため、最終信は第66信 (LXVI) ではなく第65信 (LXV) である。本のサイズにしては比較的大きく細密な挿絵が見られる。18mo（18折判）428p。

Title Page (p. i); Preface (pp. v-vi); Biography (pp. vii-viii); Poems of the Rev. Gilbert White (pp. 1-8); **The Natural History of Selborne (pp. 9-334); The Antiquities of Selborne (pp. 201-265)**; Observations on Various Parts of Nature, from Mr. White's MSS. with Remarks by Mr. Markwick (pp. 335-406); A Comparative View of the Naturalist's Calendar, as Kept of Selborne, in Hampshire, by the Late Rev. Gilbert White, M.A., and at Catsfield, near Battle, in Sussex, by William Markwick, ESQ., F.L.S., from the Year 1768, to the Year 1793 (pp. 407-421); Index (pp. 423-428).

1856年

The Natural History of Selborne, With Observations on Various Parts of Nature, and The Naturalist's Calendar. Captain Thomas **Brown** による、本文に匹敵するほどの註を採録し、Edinburgh: Chambers, London: W. Orr, Dublin: W. Curry, Junior, Co. から出版された刊本である。"Antiquities" は採録していない。2氏宛の書信は時間軸に沿って配列されている。その後、同出版社他から重版が出版され、1856年には London: James Blackwood から第11版（Index はなく総ページ数は348p）†、1890年には London: Chatto & Windus † からそれぞ

[5] 'c1853' の 'c' はラテン語 'circa' の略語、略字で、年月日などの前に置かれる前置詞である。書の冒頭扉に出版年が明記されていない場合に序文末に記された年月日から推測して「1853頃」の出版であることを表す場合に使用される。

れ出版されている。両ページに要点を示す柱を設置している。12mo（12折判）356p。

Title page (p. i); Preface (pp. iii-vi); Poems (pp. vii-xii); **The Natural History of Selborne: Letters to Thomas Pennant & Daines Barrington (pp. 1-282); Observations on Various Parts of Nature, from Mr. White's MSS., with Remarks by Mr. Markwick and the Editor (pp. 283-336)**; A Comparative View of the Naturalist's Calendar, as Kept at Selborne, in Hampshire, by the Late Rev. Gilbert White, M.A. and at Catfield, near Battle, in Sussex, by William Markwick, ESQ. F. L. S. from the Year 1768, to the Year 1793 (pp. 337-348); Index (pp. 349-356).

1875年

The Natural History and Antiquities of Selborne. A Chapter by Lord Selborne, and New Letters † Frank **Buckland** 編註本が London: Macmillan & Co. から出版される。Sam Barker, Mrs. Barker, Thos. Barker そして姪の Anne 宛ての書信が追加されている。2氏宛の書信が発信年月日（信末に表記）順で配列されている。8vo（8折判）591p。

Title Page (p. v); Preface (pp. vii-xii); New Letters, The Invitation: Samuel Barker, etc. (pp. xiii-xxiii); Contents (p. xxv); List of Illustrations (pp. xxii-xxx); **The Natural History of Selborne (pp. 1-292)**; A Comparative View of the Naturalist's Calendar, as Kept of Selborne, in Hampshire, by the Late Rev. Gilbert White, M.A., and at Catsfield, near Battle, in Sussex, by William Markwick, ESQ., F.L.S., from the Year 1768, to the Year 1793 (pp. 293-308); **Notes, Observations, and Additions by Frank Buckland (pp. 309-458)**. [Memoir of Gilbert White (pp. 311-324); Notes and Observations (pp. 325-458).]; **The Antiquities of Selborne in the County of Southampton (pp. 459-555)**; Appendix [The Roman-British Antiquities of Selborne by Lord Selborne.] (pp. 559-574); Index (pp. 575-591).

c1875

The Natural History and Antiquities of Selborne, In the County of Southampton. † # James Edmund **Harting** による編註で、London: Bickers & Son の出版である。Bennett (1837) の再編本（Messrs. Swan, Sonnenschein & Co. が版権を取得）である。翌年の1876年2版には友人 Mr. Marsham 宛のホワイトの10信が追加された。その内の最後の書信 (Selborne, June 15, 1793) では、死の11日前に書かれたもので、ホワイトが咳と痛風に悩まされて辛い気持ちを吐露している（'I have been annoyed this spring with a nervous cough, and a wandering gout, that have pulled me down very much, and rendered me very languid and indolent.' p. 557）。8vo（8折判）568p。

Title Page (p. i); List of Illustrations (p. iii); Contents (pp. v-vi); Publishers' Preface to the Fourth Edition (pp. vii); Preface (pp. ix-xx); Advertisement to the First Edition (pp. xxi-xxii); **The Natural History of Selborne (pp. 1-314)**; Observations on Various Parts of Nature from Mr. White's MSS. with Remarks by Mr. Markwick and Others. (pp. 315-375); The Naturalist's Calendar, as Kept of Selborne, in Hampshire, by the Late Rev. Gilbert White, M.A., to Which are Appended , Parallel Observations Made at Catsfield, near Battle, in Sussex, by William Markwick, ESQ., F.L.S. (pp. 381-402); **The Antiquities of Selborne in the County of Southampton (pp. 403-514)**; Poems, Selected from the MSS. of the Rev. Gilbert White (pp. 515-524); Appendix: Ten Letters from the Rev. Gilbert White to Robert

Marsham, F.R.S. 1790-1793 [Editor's Note (pp. 527-528)] (pp. 525-559); Index (pp. 561-568).

1876年

The Natural History and Antiquities of Selborne. A Chapter on Antiquities by Lord Selborne and New Letters with Photographs and Engravings from Drawings by P. H. Delamotte.[#] Frank **Buckland** 編註で、London: Macmillan & Co. の出版である。Professor Philip Henry Delamotte の手になるイラスト及び版画は圧巻で、後継刊本の中でも異彩を放っている。前書と同様に、2氏宛の書信が発信年月日（信末に表記）順で配列されている。本文に匹敵するほどの Buckland による註を掲載している。大型 (300cm x 220cm) の2巻本である。4to（4折判）vol. I: 308p, vol. II: 283p.

<Vol. I>

Title Page (p. v); Preface (pp. vii-xii); New Letters, The Invitation: Samuel Barker, etc. (pp. xiii-xxiii); Contents (p. xxv); List of Illustrations (pp. xxii-xxix); Photographs by the Carbon Process (p. xxx); **The Natural History of Selborne (pp. 1-292)**; The Environs of Selborne (p. 292); A Comparative View of the Naturalist's Calendar, as Kept of Selborne, in Hampshire, by the Late Rev. Gilbert White, M.A., and at Catsfield, near Battle, in Sussex, by William Markwick, ESQ., F.L.S., from the Year 1768, to the Year 1793 (pp. 295-308).

<Vol. II>

Title Page (p. v); Contents (p. vii); List of Illustrations (pp. viii-ix); Photographs by the Carbon Porcess (p. x); **Notes, Observations, and Additions by Frank Buckland (pp. 309-458)**. [Memoir of Gilbert White (pp. 3-16); Notes and Observations (pp. 17-150).]; **The Antiquities of Selborne in the County of Southampton (pp. 151-247)**; Appendix on The Roman-British Antiquities of Selborne by Lord Selborne.] (pp. 249-266); Index (pp. 267-283).

1877年

The Natural History and Antiquities of Selborne, In the County of Southampton. [†] [#] Professor Thomas **Bell** による編註で、London: John Van Voorst から出版された充実した完成度の高い2巻本である。Vol. I には 'Natural History & Antiquities' 他を、Vol. II には、ホワイトによる未刊の著作、博物誌に関する記録、リンネから弟 John White[6] に宛てた4信、親類への書信、編者による註記や回顧録、ホワイトの出納簿などを収録している。Bell 氏は、White の居宅を永年所有、居住していた学者である。編註者による非常に詳しい註で、鳥に関する註の多くは Professor Alfred Newton の手になる註である。書誌に関する情報の多くは Bennett (1837) によっている。大部の4vo（4折判）vol. I: 507p, vol. II: 410p.

<Vol. I>

Title Page (p. iii); [Dedication] (p. v); List of Illustrations in Vol. I (p. vii); Preface (pp. ix-xv); **Memoir (pp. xvii-lix)**; **The Natural History of Selborne (pp. 1-274)**; **The Antiquities of Selborne, in the County of Southampton (pp. 275-374)**; Appendix [in Latin] No. I (pp. 375-377); Number II (pp. 377-380); Number III (pp. 381-308); Number IV (pp. 399-4009; Number V (pp. 401-403); A Comparative View of the Naturalist's Calendar as Kept at Selborne, in Hampshire, by the Late Rev. Gilbert White, M.A. and at Catsfield, near Battle, in Sussex,

[6] この John White (1727-1780) は、ジブラルタルに住み、博物学の造詣も深いホワイトの実弟のである。しかし、Bell (1877) は、Aikin & Markwick (1802) もこの弟が出版した (p. 219) としているがそれは誤りである。

by William Markwick, ESQ., F.L.S. from the Year 1768 to the Year 1793 (pp. 405-419); Observations on Various Parts of Nature. From Mr. White's MSS. with Remarks by Mr. Markwick (pp. 421-495); Poems (497-507).

<Vol. II>

Title Page (p. iii); List of Illustrations in Vol. II (p. v); **Correspondence of Gilbert White (pp. 1-303)**; On the Sense of Hearing in Fishes (pp. 304-307); Sermon (pp. 308-315); Gilbert White's Account-Book (pp. 316-346); Gilbert White's Garden Kalendar (pp. 347-359); Description of Dufour's Fire-Escape (360-361); List of the More Noteworthy Animals and Plants (pp. 362-373); The Geology of Selborne (pp. 374-377); Appendix: On the Roman-British Antiquities of Selborne. By Lord Selborne (pp. 378-394); Note on Some Recent Discoveries in Selborne Church, and Their Bearing on the History of the Sudington Preceptory of the Knights Templars (pp. 395-398); Index (pp. 399-410).

c1879年

The Natural History of Selborne, And the Naturalist's Calendar. † # G. Christopher **Davies** による刊本で、London: Frederick Warne & Co. の出版である。動植物の細密なイラストが多数挿入されている。註は比較的コンパクトな内容で各書信末に付されている。Davies は 'Introduction' で "He kept no personal diary." (p. x) とあって、ホワイトは日記をつけていないと述べているが、それは正しくない。また、同ページに、"In an edition of his book published in 1802, nine years after his death, his brother John wrote the following short sketch of his life." とあるが、弟 John は1781年に没しているので、この小伝を書いたのは Gilbert の甥（John White）である（Martin 1934: 157; Bennett 1837: ix）。小判ながら挿絵が美しい。バリントン氏宛最終信の発信年が正しくは '1787' のところ、'178' と誤っている (p. 287)。16mo（16折判）470p。

Title Page (p. iii); Advertisement to Original Edition (pp. v-vii); Introduction (pp. ix-xvi); Contents (p. xvii); **The Natural History of Selborne (pp. 3-287)**; **The Antiquities of Selborne. (pp. 289-380)**; Observations on Various Parts of Nature from Mr. White's MMS. with Remarks by Mr. Markwick. (pp. 381-444); A Comparative View of the Naturalist's Calendar. As Kept at Selborne, in Hampshir, by the Late Rev. Gilbert White, M.A., and at Catsfield, near Battle, in Sussex, by William Markwick, ESQ., F.L.S., from the Year 1768 to the Year 1793 (pp. 445-458); Poems Selected from the MSS. of the Rev. Gilbert White (pp. 459-466); Index (pp. 467-470).

1887年

1) *The Natural History and Antiquities of Selborne. A Chapter by Lord Selborne, and New Letters* † Frank **Buckland** 編註本が London: Macmillan & Co. and New York から出版される。同編註者の先行刊本同様に、2氏宛の書信が発信年月日順で配列されている。1875年 , 1876年と内容はほぼ同じである。8vo（8折判）480p。

Title Page (p. v); Preface (pp. vii-xii); New Letters, The Invitation: Samuel Barker, etc. (pp. xiii-xxii); Contents (p. xxiii); List of Illustrations (pp. xxv-xxix); **The Natural History of Selborne (pp. 1-261)**; A Comparative View of the Naturalist's Calendar, as Kept of Selborne, in Hampshire, by the Late Rev. Gilbert White, M.A., and at Catsfield, near Battle,

in Sussex, by William Markwick, ESQ., F.L.S., from the Year 1768, to the Year 1793 (pp. 263-283); **Notes, Observations, and Additions by Frank Buckland (pp. 285-350)**; **The Antiquities of Selborne in the County of Southampton (pp. 351-441)**; Appendix on the Roman-British Antiquities of Selborne by Lord Selborne (pp. 443-465); Index (pp. 469-480).

2) *The Natural History of Selborne.* † London, Paris, New York: Cassell の出版で、Henry **Morley** による Introduction と編集である。若年層に向けた原註も編者の註も挿絵もない簡素な2巻本である。18mo（18折判）vol. I: 192p; vol. II: 192p。

<Vol. I>

Title Page (p. 3); Introduction (pp. 5-8); **The Natural History of Selborne: Letters to Pennant I – XLIV, to Barrington I – XIV (pp. 9-192)**.

<Vol. II>

Title Page (p. 3); Introduction (pp. 5-7); **The Natural History of Selborne: Letters to Barrington XV – LXVI (pp. 9-192)**.

3) *The Natural History of Selborne, with a Naturlist's Calendar and Additional Observations.* † # The Camelot Series Edited by Ernest Rhys. London: Walter Scott の出版で、Richard **Jefferies** の Preface がある。挿絵はない。各書信の結語を削除するなど簡素な刊本である。8vo（8折判）366p。

Title Page (p. iii); Contents (p. v); [Gilbert White's biography] (p. vi); Preface (pp. vii-xii); **The Natural History of Selborne (pp. 3-288)**; A Naturalist's Calendar (pp. 289-302); Observations in Various Branches of Natural History Selected from White's MSS. with Notes by William Markwick (pp. 303-366).

1890年

The Natural History of Selborne, with Observations on Various Parts of Nature. † London: Chatto & Windus の出版で、編註者は Thomas **Brown** である。書信が時間軸に沿って配列している。全ページに柱を配置している。8vo（8折判）348p。

Title Page (p. i); Preface (pp. iii-iv); **The Natural History of Selborne (pp. 1-282)**; Observations on Various Parts of Nature, from Mr. White's MSS. with Remarks by Mr. Markwick and the Editor (pp. 283-336); A Comparative View of the Naturalist's Calendar, as Kept of Selborne, in Hampshire, by the Late Rev. Gilbert White, M.A., and at Catsfield, near Battle, in Sussex, by William Markwick, ESQ., F.L.S., from the Year 1768, to the Year 1793 (pp. 337-348).

1895年

The Natural History of Selborne and the Naturalist's Calendar.# Glasgow & Dublin: **Blackie** & Son の刊本である。編註者名は記されていない。若年層向けの新しい刊本と思われる。"It has been thought better to introduce these Observations in the text, where they fit in with the subject, than to print them separately." (p. 21) と編者註で述べ、鳥類、爬虫類、昆虫など関係する観察記録を 'Observations on Nature' から取り出して書信末の所々に編入しているのが特徴である。奇数ページに柱を配置している。8vo（8折判）252p。

Title Page (p. iii); Contents (p. v); Introduction (pp. 7-9); The Invitation to Selborne (pp. 10-12); **The Natural History of Selborne (pp. 13-226)**; Observations on Nature (pp. 227-238);

A Comparative View of the Naturalist's Calendar, as Kept of Selborne, in Hampshire, by the Late Rev. Gilbert White, M.A., and at Catsfield, near Battle, in Sussex, by William Markwick, ESQ., F.L.S., from the Year 1768, to the Year 1793 (pp. 239-252).

1896年

The Natural History of Selborne. † Boston, London: Ginn の出版で、Introduction は Edward S. **Morse** による若年層向けの簡略版 (Abridged) である。ラテン語の語句や引用、読者の興味に向かないような文章を大幅に削除している。ただし、ホワイトが書いた 'Observations on Nature' の一部を関連する文章中に挿入している。

Title Page (p. i); Introduction (pp. iii-v); Introductory Sketch (pp. vii-xii); Publisher's Note (p. xiii); Invitation to Selborne (pp. xiv-xvi); **The Natural History of Selborne (pp. 1-251)**.

1900年

1) *The Natural History of Selborne.* † # Grant **Allen** 編註による、John Lane, The Bodley Head の出版である。1902年重版本もある。1789年初版の 'Antiquities' 末尾の '*More* Particulars *respecting* the Old Family Tortoise, *omitted in the* Natural History' は完全に削除されている。挿絵と 'Introduction' が優れている。8vo（8折判）552p。

Title Page (p. i); [Dedication: To A. E. L. in Commemoration of August 13 1898 This Edition is Dedicated by the Publisher] (p. iii); Note (p. v); Contents (p. vii); List of Illustrations (pp. xi-xix); [Maps of the Village Selborne (pp. xx-xxiv); Introduction (pp. xxv-xl); **The Natural History of Selborne (pp. 1-407)**; Title Page [Observations on Various Parts of Nature, from Mr. White's MSS. with Remarks by Mr. Markwick. (pp. 415-483).] (p. 411); Advertisement (pp. 413-414); A Comparative View of the Naturalist's Calendar, as Kept of Selborne, in Hampshire, by the Late Rev. Gilbert White, M.A., and at Catsfield, near Battle, in Sussex, by William Markwick, ESQ., F.L.S., from the Year 1768, to the Year 1793 (pp. 485-506); Poems (pp. 507-514); Appendix (pp. 515-538); Index (pp. 539-552).

2) *The Natural History & Antiquities of Selborne & A Garden Kalendar.* † # R. Bowdler **Sharpe** による編註で、London: S. T. Freemantle の出版である。出版の際に大英博物館所収の原本（manuscripts）から削除された箇所を示す重要な刊本である。原本（複製）が各巻に１信（ペナント氏宛第12信とバリントン氏宛第49信）折り込まれている。本文の紙葉とは質の異なるものを使い1ページ全体を石版印刷で仕上げてページ間に綴じ込んでいる非常に美しい挿絵が印象的である。大部の2巻本。8vo（8折判）vol. I: 427p, vol. II: 443p。

<Vol. I>

Title Page (p. v); Contents (p. vii); List of Full-Page Illustrations (pp. ix-xii); List of Smaller Illustrations (pp. xiii-xv); Introduction (pp. xvii-xxiii); **The Natural History of Selborne: To Pennant Letters I-XLIV (pp. 1-185)**; **A Garden Kalendar Edited by R. Bowdler Sharpe, LL.D. F.L.S. with an Introduction (pp. 189-198) by the very Rev. S. Reynolds Hole, D.D. Dean of Rochester (pp. 185-421)**; Appendix I (pp. 422-424); Appendix II [Notes on the Geology of the Selborne District by C. W. Andrews, F.G.S. (pp. 425-427).

<Vol. II>

Title Page (p. v); Contents (p. vii); List of Full-Page Illustrations (pp. ix-xii); List of Smaller Illustrations (pp. xiii-xv); **The Natural History of Selborne: To Barrington Letters**

I-XLIV (pp. 1-205); **The Antiquities of Selborne (pp. 205-316)**; Appendices [in Latin]; Appendix Number I (pp. 319-320); Number II (pp. 321-324); Number III (pp. 325-340); Number IV (pp. 341-342); Number V (pp. 343-345)] (pp. 345); Bibliography (pp. 347-364); Index (pp. 365-443); Errata (p. 443).

1901年

The Natural History and Antiquities of Selborne. † # L. C. **Miall** and W. Warde **Fowler** 編註本[7]で、内容はまったく同じながら、London: Methuen & Co. 英国本※と New York: P. G. Putnam's Sons 米国本がある。Preface によると、本刊本はラテン語の 'Appendix' と 'Naturalist's Calendar' を除く1789年初版を再版したものである。鳥類関連の註はすべて Warde Fowler が担当した。28ページに及ぶ内容豊かな 'Introduction' を掲出している。また、Martin (1934) が "The editor's notes are useful, to the point." (p. 180) と述べているように、註の内容が頗る有用で的確であること、先行資料を精査して註を付していることなどにより評価の高い刊本である（市河 1940: lxxi; Nicholson 1929: 15）。挿絵はない。8vo（8折判）386p。

Title Page (p. iii); Preface (p. v); Contents (p. vii); Introduction (pp. ix-xxxvi); [Title Page of the First Edition] (p. xxxvii); Advertisement to the First Edition (pp. xil); **The Natural History of Selborne (pp. 1-236); The Antiquities of Selborne, in the County of Southampton (pp. 237-317)**; Observations on Various Parts of Nature, from Mr. White's MSS. (pp. 319-356); Index (pp. 357-386).

c1902年

The Natural History of Selborne. † London, New York, Melbourne: Cassell の出版で、編註者は Richard **Kearton** である。表紙に "With Notes by R. Kearton F.Z.S. & 123 Illustrations from Photographs Taken Direct from Nature by Cherry & Richard Kearton." とあるように、123枚の白黒写真（イラスト）を挿入した美しい現代的な趣のある刊本である。8vo（8折判）294p。

Title Page (p. iii); List of Illustrations (pp. v-vi); Introduction (pp. vii-xiv); Advertisement (pp. xv-xvi); **The Natural History of Selborne (pp. 1-284)**; Index (pp. 285-294).

c1927年

White's Selborne for Boys and Girls. † Marcus **Woodward** 編註本で、Oxford: Basil Blackwell の出版である。本刊本は、学校の成績優秀者に贈呈された書の1つであるが、原本は難解で若年層には適さないため、大幅に書き換えられて出版された刊本である。8vo（8折判）308p。

Title Page (p. i); Preface (pp. iii-vi); List of Illustrations (pp. vii-viii); Introduction: White of Selborne (pp. ix-xv); **White's Selborne for Boys and Girls (pp. 1-263)**; The Naturalist's Calendar (pp. 265-303); Epilogue (p. 304); Index (pp. 305-308).

1929年

The Natural History of Selborne. † # E. M. **Nicholson** の編註で、London: Thornton Butterworth の出版である。'Antiquities' は削除されている。扉の対面ページに 'GILBERT WHITE. From a painting in possession of Mr. John Glen.' と見出しを付したホワイトの肖像画がある。また、本編中扉の対面ページにも 'GILBERT WHITE. The Lytton-Knebworth Portrait.' と題した、

[7] この Miall & Fowler (1901) 本は、西谷退三が『セルボーン』訳出のために利用した底本である。

扉対面のものとは異なるホワイト肖像画がある。'Introductory Chapter' 及び書信に対する註において、詳細な体系的書誌 (systematic bibliography) 情報を記す重要な刊本である。ホワイトによる原註は脚註に、Nicholson 自身によるコンパクトながら的確な註は各書信末に掲載している。1789年初版、Aikin & Markwick (1813) を模した大型の4to（4折判）416p。

Title Page (p. 7); Contents (p. 9); List of Illustrations (p. 11); Editor's Preface (pp. 13-16); Advertisement to the First Edition (pp. 17-18); Introductory Chapter (pp. 19-74); **The Natural History of Selborne (pp. 75-302)**; Summary of the Weather (pp. 387-396); Poems, the Naturalist's Calendar, Synonymy of Species, Index to Names and Places, General Index (pp. 397-416).

以上、1795年にベルリンで出版された刊本から1929年の Nicholson 編註本までの各種刊本の書誌を時間軸に沿って見てきた。本節の考察を以下にまとめる。

1) 刊本の構成から評価すれば、'A Naturalist's Calendar' と 'Observations' を採録して1つの著書とした1795年本と、それらと主要部の Natural History を合体させた Aikin & Markwick (1802) が後続の各種刊本の内容構成に与えた影響は極めて大きい。また、ホワイトの 'Poems' を加えた Mitford (1813) も重要な刊本の1つである。
2) ホワイトが親族らに宛てた書信を新たに加えた刊本も注目に値する（Buckland (1875, 1876, 1887) など）。
3) 1789年初版のように、元来本書は 'Natural History' と 'Antiquities' の2部構成となっているが本書を有名にしたのは前者であるため、しばしば、後者を削除している刊本が出版されている（Aikin & Markwick (1802)、Jardine (1829) など）。
4) 各刊本のサイズは、大きい順に、4to（4折判）、8vo（8折判）、12mo（12折判）、16mo（16折判）、18mo（18折判）などがある。8vo（8折判）サイズのものが最も多く出版されている。
5) 細密で大小様々な挿絵を取り入れている刊本が多いが、中には本文の紙葉とは質の異なるものを使用して石版印刷で仕上げて綴じ込んでいる刊本もある（Sharpe 1900, Buckland 1876など）。一方、簡略版には挿絵は見られない（Morley (1887) など）。
6) 2氏宛の書信の配列が宛先別ではなく発信年月日順になっているものもある（Jardine (1833), Jesse & Jardine (1851), Brown (1856,1890), Buckland (1875, 1876, 1887) など）。ペナント氏宛の書信とバリントン氏宛の書信の性質が異なること、ホワイトは2氏宛を分けて採録していること、これらの理由から2氏の書信を混成させるのは好ましくないと批判している編者もいる (Allen 1900)。
7) Aikin & Markwick (1802) のホワイト小伝を掲載しているものが多いが、中には、40ページ以上の紙幅を割いてホワイトの出自や伝記について触れているものもある（Bell (1877) など）。
8) 各種刊本に対する1人の人物の関与の度合いが異なるものもある。例えば、Sir William Jardine は、ある人物の依頼により註を用意していたが、その註を採録予定の書物の出版が頓挫した。しかし、1829年と1833年には、Jardine の註を巻末に掲載した刊本が登場する。また、1851年には Jesse 編註し、Jardine の註も採録した刊本が出版された。いずれも Jardine は直接関与していない。そして1853年になってようやく、Jardine が単独で編註し、内容が頗る充実した刊本が出版された。

9) 多くは1巻本である。2巻本の場合は、第1巻にはペナント氏宛書信を採録し、第2巻にはペナント氏宛書信の残りの部とバリントン氏宛書信、あるいはバリントン氏宛書信のみを採録する刊本が多い（Aikin & Markwick (1802)、Sharpe (1900) など）。しかし中には、第1巻に2氏宛の110信を採録し、第2巻には、もっぱらホワイトが親族など、2氏以外に当てた書信等を再録した刊本もある（Buckland (1876), Bell (1877) など）。
10) 1人の編註者によるものが多いが複数の学者が註記した刊本もある（Rennie (1833) など）。
11) 若年層向けの簡略版も少なからず出版されている（Morley (1887), Blackie (1895) 本、Morse (1896) など）。

以上、本節では時間軸にそって『セルボーン』各種刊本を史的書誌の視座から検討してきた。次節 3.2では『セルボーン』の構成そのものにより焦点を当てた体系的書誌について考察していく。

3.2 『セルボーン』の体系的書誌

ホワイトは、そもそも出版する予定のない、2氏に宛てた単なる一連の私信を弟や文通相手に強く勧められてそれらを整理し、加除修正を加えて1つの書にして出版したが、それは相当の編集作業が必要であったことは容易に想像される。『セルボーン』の書誌を明らかにするためには、その編集過程に光を当てることが極めて重要である。

この間の調査研究では、発信年月日の改変や書信全体が出版企図後に補追（見せかけの可能性のある書信）、原本の一部を削除、文章（一部箇所）の切り貼り（移動、転用）、宛先の偽造、字句の改変など様々な形で手が加えられていることが明らかになっている。本節では、これらの諸点について統合的に考察していくことにする。なお、本節の考察にあたって主として参考にした資料は、『セルボーン』刊本では Nicholson (1929)、Sharpe (1900)、Miall & Fowler (1901)、Allen (1900) 、訳書では壽岳 (1949) と西谷 (1958)、そして、その他『セルボーン』の関連論考等である。なかでも Sharpe (1900) から書誌に関する多くの有益な情報を得た。

3.2.1 2氏に宛てた書信の発信日付と発信場所

まず、表2が示すように、『セルボーン』に採録されている2氏宛ての書信総数は110通である。そのうち、これまでも関連論考（日臺 (2019) など）や各種刊本の註などで指摘されてきたように、発信年月日のまったくない書信 (n.d.) はペナント氏宛が11信、バリントン氏宛で合計20信である。

表2 2氏宛書信の発信年月日の有無

	宛先		計
	ペナント氏	バリントン氏	
Y.M.D.	29[7]	46[7]	75[14]
Y.M.	2	0	2
Y.	2	0	2
n.d.	11[11]	20[20]	31[31]
計	44[18]	66[27]	110[45]

Y: 年 ; M: 月 ; D: 日 ; n.d.: 年月日すべてがないもの
[ ]:「見せかけの可能性のある書信」の内数

Nicholson (1929) が、『セルボーン』所収の書信について、

> The *Natural History* consists ostensibly of forty-four Letters to Pennant and sixty-six to Barrington. Of these many bear definite dates; others are undated and are simply essays written to cover the rest of the ground, after publication has been decided on. (p. 38)

と述べているように、日付のない書信は背景知識を提供するため、出版を決意した後で書かれたものである。また、Allen (1900) は、実際にペナント氏宛に発信された最初の書信の註で、

> With this letter, the first bearing a date, we begin the real series of White's interesting and valuable correspondence with Pennant. See Introduction. The style of the true letters is far superior to that of the artificial addition. (p. 43)

と見解を述べ、実際に発信された書信の文体は、見せかけの書信の文体よりもはるかに光彩を放っているとしている。

しかし、各種資料を精査すると、たとえ年月日が記されている書信であっても、実際に投函されたものではなく、出版が企図された後に追補された可能性のある書信もかなりあることがわかった。表2の、[ ] で示した数である。具体的には、発信年月日のある (Y.M.D) ペナント氏宛29信のうちの7信が、同じくバリントン氏宛46信のうちの7信が見せかけの可能性のある書信である。例えば、'September 9, 1778' と日付のあるバリントン氏宛第43信について、Allen (1900) は、"This is clearly not a real letter, but an additional essay on the notes of birds, written when the idea of publication had been adopted." (p. 325) と述べ、出版のために補追された見せかけの書信であるとしている。そして、筆者が探査して明らかになったのは、総数110信のうち、45信が本書のために補追された、いわば「見せかけの書信」である可能性が高いことである。全体に占めるその割合は、40.9% (45/110) である。興味深いのは、そのうちの14信は日付があるにも関わらず大部分が本書の出版に合わせてホワイトが補追した書信であることである。このことは、今回の研究調査で明らかになった重要な書誌情報である。

また、表3は、書信に記されている発信場所をまとめたものである。

表3 2氏宛書信の発信場所

発信場所	宛　先		計
	ペナント氏	バリントン氏	
Selborne	30	46	76
Ringmer, near Lewes[8]	0	2	2
Fyfield, near Andover[9]	0	1	1
—	14	17	31
Total	44	66	110

[8] Ringmer には、ホワイトの伯母Mrs. Rebecca Snooke が居住していた。ホワイトはしばしば訪問していたようである (Bell 1877, vol. II: 19)。ただし、Bell (1877) は伯母ではなく 'cousin' としているがRebeccaはホワイトの父Johnの妹なので 'aunt' が正しいであろう（Davidson-Houston (1993: 9) を参照）。

[9] Fyfield には、ホワイトの一番下の弟Henryが住んでいた。ホワイトはよくここで親族やバリントン氏に宛てた書信を書いた (Bell 1877, vol. I: xxxviii)。

全体の69.1% (76/110) がホワイトの居住地である Selborne から発信されたもの、あるいは発信したように見せかけた書信である。

3.2.2 『セルボーン』における発信日付等の改変

Nicholson (1929) は、その導入章 (Introductory Chapter) において、大英博物館に現存するホワイトの書信原本 (MSS.: manuscripts) と実際に『セルボーン』に書き込まれた書信を様々な角度から比較して、認められた改変、修正箇所などについて詳細に記述している。そこで、“Dates were frequently changed.” (p. 37) と Nicholson が指摘しているように、その改変箇所は表4に示す通りである。

表4『セルボーン』において改変された年月日

No.	信番号	『セルボーン』の年月日	原本の年月日
	ペナント氏宛		
1	10	August 4, 1767	August 10, 1767
2	12	November 4, 1767	November 6, 1767
3	14	March 12, 1768	March 14, 1768
4	15	March 30, 1768	March 14, 1768
5	16	April 18, 1768	April 19, 1768
6	17	June 18, 1768	June 10, 1768
7	18	July 27, 1768	July 25, 1768
8	25	Aug. 30, 1769	Sept. 1, 1769
9	28	March 1770	May 12, 1770
10	32	October 29, 1770	Sept. 14, 1770
11	35	1771	July 19, 1771
12	36	Sept. 1771	Sept. 25, 1771
13	37	1771	Sept. 25, 1771
14	40	Sept. 2, 1774	July 8, 1773
	バリントン氏宛		
1	1	June 30, 1769	July 6, 1769
2	2	Nov. 2, 1769	Nov. 9, 1769
3	49	May 7, 1779	n.d.
4	54	n.d.	June 12

このように、ホワイトは発信年月日の改変を行なっていた。Nicholson (1929) は、‘no apparent reason, from a day to a week (in one case a year)’ (p. 38) と述べ、日付改変の理由は不明で、改変は1日から1週間、中にはペナント氏宛第40信のように1年というズレが認められるケースもあるとしている。また、興味深いのはペナント氏宛の書信の日付が多く改変されていることである。おそらく、ペナント氏宛の書信の多くは、出版を意識せずに書いたものが多かったのがその1つの要因であろう。そして、改変は日付けに留まらず、‘some are divided into two or three, others fused together without regard for chronological sequence or even the correspondent addressed.’ (Nicholson 1929: 38) とあるように、中には、2から3分割されたものや、時間のズレのあるもの、あるいは宛先が異なる書信に融合させたものさえある。それらの詳しい内容は、以降の節で検討していくことにする。

3.2.3 特筆すべき書誌事項を含む書信

本節では、本書に採録された2氏宛の書信の書誌のうち、書誌の考察上、特記すべき事項を含む書信を検討していきたい。

【ペナント氏宛書信】

第1信 n.d.

Sharpe (1900) が以下のように述べているように、実際にペナント氏に送られたのは第10信からで、この第1信を含め、最初の9信は序説の意味合いが強い (Sharpe 1900, vol. I: 1)。

> The "Letters to Pennant," with which Gilbert White commenced his volume on the "Natural History of Selborne," were never really addressed to that gentleman, but were evidently interpolated for the purpose of forming an introduction to the actual correspondence, so as to give some idea of the characteristics of Selborne and the surrounding country. The first letter absolutely sent to Pennant was 'Letter X' of the 'Natural History,' as we learn from the original MS. letters now preserved in the British Museum. (Sharpe 1900, vol. I: 1)

この書信は出版のために新たに書き起こした、いわゆる「見せかけの偽り書信」である。それが明確なのは、本文中の、'This spring produced, *September 14, 1781*, ...' という一節である。1781年に書かれたものである。

第2信 n.d.

Allen (1900) は、一部は実際に送られた数信の一部の可能性があるとしているが (p. 7)、どの部分がどの書信から転用されたのかは定かでない。いずれにしても、この書信も見せかけの書信である。

第3信 n.d.

Allen (1900) は、"This letter on the fossils of Selborne is clearly a later insertion, and is a sufficiently perfunctory performance." (p. 11) と註で述べ、さらに、同書信の p. 12 にある 'an inclining pass' というのは明らかに1780年に建設された 'Bostal' と呼ばれる道であるとし、この信も後で挿入された書信であると記している。

第4信 n.d.

この信も 'Obviously an added letter.' (Allen 1900: 15) である。

第5信 n.d.

この書信には、'1779' から '1787' までの平均雨量について述べた節があり、これらの西暦から判断すると、この書信は出版間際に書かれたものと推測することができる。Allen (1900) も、"A made-up letter on the roads and human aspects of Selborne." (p. 19) と註記している。

第9信 n.d.

Allen (1900) は、この見せかけの書信の後半部に 'this spring (viz., 1784)'「この春（つまり1784）」とあることについて、

> A single sentence in Letter IX., however, where he refers to the spring of 1784, allows us to see that these introductory epistles, which pretend to usher in the series, were really an afterthought, designed to put the reader in a position for understanding the matter that follows. (p. xxviii)

と述べ、ホワイトがこの一句で 1784 年の春について言及していることから、一連の書信の始まりを装ったこれらの導入概説書信が実際には後付けであり、読者が後続する書信の中で展開する事柄を理解しやすくするために意図されたものであろうとしている。

第10信　August 4, 1767.

実際に発信された最初の書信である。また、原本の宛名は 'To Pennant, Esq., at Downing, in Flintshire, North Wales' とあって、この時ホワイトはまだペナント氏の洗礼名を知らなかったことがわかる (Bell 1877, vol. I: 27)。また、この書信は、実際にペナント氏宛に送られた最初の書信ではあるが、第10信の以下の出だし部分が本書では省略されている (Bell 1877: 27)。

> Nothing but the obliging notice which you were so kind as to take of my trifling observations in the natural way when I was in town in the spring, and your repeated mention of me in some late letters to my brother, could have emboldened me to enter into a correspondence with you, in which, though my vanity cannot suggest to me that I shall send any information worthy your attention, yet the communication of my thoughts to a gentleman so distinguished for these kinds of studies will unavoidably be attended with satisfaction and improvement on my side.

また、"How strange is it, that the swift, which seems to live exactly the same life with the swallow and house-martin, should have us before the middle of August invariably." の一節は、ペナント著の British Zoology (1768, p. 246) に引用され、"For these, and several other observations, we owe our acknowledgements to the Reverent Mr. White, of Selborne, Hampshire." と、ペナント氏はホワイトが資料提供者であることを明記している (Bennett 1837: 42)。

第11信　September 9, 1767.

大英博物館の原本によると、ホワイトは当初1つがいのヤツガシラがホワイト所有の牧場で営巣すると思っていたようであるが、それを確認する前にわんぱく小僧によって巣も卵も取られてしまった。そこで、原本の一節、'but, before I knew anything of the matter, the nest and eggs (neither of which I saw) were taken by some idle boys.' を本書では、'but were frighted and persecuted by idle boys, who would never let them be at rest.' に修正している。修正後の文章はいささか文学的趣向の響きがある (Sharpe 1900, vol. I: 41)。

第12信　November 4, 1767.

発信地が削除され日付も 'Nov. 6, 1767.' から変更されている (Sharpe 1900, vol. I: 45)。また、第3, 10段落が補追されている。この書信ではホワイトが発見したカヤネズミの特徴を報告している。

第14信　March 12, 1768.

実際の書信の日付は "March 14, 1768." である (Sharpe 1900, vol. I: 55)。

第15信　March 30, 1768.

大英博物館所収の原本によると、1つの書信を先信（March 14, 1768）と本信に2分割して、本信に新しい日付（March 30, 1768）を付したものである (Sharpe 1900, vol. I: 57)。

第16信　April 18, 1768.

実際の日付は 'April 18th, 1768' ではなく 'April 19, 1768' である (Sharpe 1900, vol. I: 61)。イシハラノガンの保護色とムシクヒの類には3種類があることを伝える重要な書信の1つである。

第17信　June 18, 1768.

原本の日付は ‘June 10, 1768’ で、‘June 18, 1768’ ではない。Sharpe (1900) は、‘It is curious that the author should have altered the actual date of so many of his letters in his published work.’ (vol. I, 67) と述べ、ホワイトが頻繁に書信の日付を変更する奇妙さに触れている。しかし、少なくともこの第17信の日付は変える必要があった。というのは、この書信は、原本では実際の発信の日付は ‘June 10’ であることから、ペナント氏からの ‘June 10’ 付けの書信の返信として同じ日、すなわち ‘June 10’ として返信するのは具合が悪いのである。そのために少し日付を遅らせて ‘June 18’ としたものであろう。ただし、原本の冒頭第1段落は本書では削除されていて、そこには ‘Your obliging letter dated May the 4th’ とある。したがって、ペナント氏からホワイトに送られた書信の日付は ‘May 4’ なのに、なぜホワイトは本書においてわざわざ ‘June 10’ に変更したのか不可解である。

第18信　July 27, 1768.

原本では ‘July 25’ が本書では ‘July 27, 1768’ となっている (Sharpe 1900, vol. I: 75)。

第19信　Aug. 17, 1768.

Sharpe (1900) は、‘This is one of the most important letters in the book. It is the first clear definition of the three migratory species of Willow-Wrens, or Willow Warblers …, which annually visit Great Britain.’ (vol. I: 79) として、最も重要な書信の1つであると述べている。

原本では 第18信と一部重複する箇所があるが、‘nay 100 in a flock’ の文句がここでは削除されている。Sharpe (1900) によれば、‘as if the author fancied that his estimate might have been too large.’ とあって、ホワイトが鳥数を過大に想像してしまったので削除したのではないかと推測している (Sharpe 1900, vol. I: 81)。

第20信　October 8, 1768.

原本の冒頭4段落の比較的長い節と末尾の短い1段落が削除されている (Sharpe 1900, vol. I: 83-88) 。

また、原本では ‘My brother from Fleet Street [Pennant’s publisher, Benjamin White] being with us, was amusing himself with a gun, &c.’ となっている箇所が、本書では、‘This week twelve months a gentleman from *London*, being with us, was amusing himself with a gun’ (Sharpe 1900, vol. I: 86) に修正されている。私的印象を払拭しようとしたものであろう。

また、原本で ‘Oct. 8, 1768’ の日付のある書信の一部は第17信と第20信に転入されている。なお、Harting (c1875) では日付が ‘Oct. 3, 1768’ と誤っている。

第21信　Nov. 28, 1768.

第7段落の1文は、原本ではPS（追伸）に記されている文である (Sharpe 1900, vol. I: 91)。弟 John を ‘my South country correspondent at Gibraltar’、弟 Benjamin を ‘my Brother’ とそれぞれ記している (Sharpe 1900, vol. I: 92)。

第22信　Jan. 2, 1769.

Jardine (1853) によれば、前信同様に出版をまったく意識せずに観察したままを書いたものである (p. 51)。

第25信　Aug. 30, 1769.

原本の日付は ‘September 1st, 1769’ である (Sharpe 1900, vol. I: 107)。

第26信　December 8, 1769.

これは見せかけの書信であるが、原本はホワイトの *Naturalist's Journal* に 'Dec. 2, 1769' の日付で記した観察記録である (Nicholson 1929: 36)。

第28信　March 1770.

原本の日付は、'May 12th, 1770' である (Sharpe 1900, vol. I: 119)。また、原本の冒頭4段落が本書では削除されている (Sharpe 1900, vol. I: 119-120)。以下の一節は、ホワイトの思想が鮮やかに表現されている非常に重要な文章でありながらホワイトは、なに故本書に採録しなかったのか。彼の謙譲で控えめな性格が要因だろうか。一方、壽岳 (1949) の註記では、ペナント氏宛第34信の第5段落に要旨が類似した節があるとしているが、本節は原本では第29信冒頭にある1節であることを壽岳は把握していなかったようである。

> Tho' you are embarked in a more extensive plan of natural history, yet I am glad to find that you do by no means give up the Brit: zoology: that I think should be your principal object: & I hope you will continue to revise it at your leisure, & to re-touch it over 'til you have render'd it as perfect as the nature of the work will admit of. If people that live in the country would take a little pains, daily observations might be made with respect to animals, & particularly regarding their life & conversation, their actions & œconomy, which are the life & soul of natural history. (Sharpe 1900, vol. I: 119)

壽岳 (1949) は、註記でこの削除された一節を訳出しているので、それを以下に引用する。

あなたは博物學の更に廣漠たる大海へ乗り出されたが、決して英國動物誌をお見すてになるのではないことを知り、甚だ愉快です。それこそあなたの主要目標であつて欲しい。そして私は、あなたが暇あることにその補訂を續け、かかる著作物として許され得る限りの完全なものとまるまで、常に手を加へて行かれるのを希望してやみません。もしも田舎に住んでゐる人々が少し骨を折りさへすれば、動物に關し、とりわけその生態と習性、その行動と體制に關し、日々の觀察可能なるべく、そこに博物學の生命またたましひがあると信じます。（上巻、p. 150）

第29信　May 12, 1770.

第1段落は、原本では先信 (May 12th, 1770) の一部に見られるが、他の段落は原本にはない。出版に際して補間 (interpolation) したものであろう (Sharpe 1900, vol. I: 122)。

第32信　October 29, 1770.

本書の第1~3段落は、ペナント氏宛第31信（Sept. 14, 1770）の一部を成す (Sharpe 1900, vol. I: 136)。

第33信　Nov. 26, 1770.

大英博物館にはこの日付の書信はない。本書出版のために後で書かれたものであろう (Sharpe 1900, vol. I: 139)。

第34信　March 30, 1771.

原本から削除された最後の文、'It is time now to have a little conversation face to face after we have corresponded so freely for several years.' から、まだホワイトはペナント氏に面会していないことがわかる (Sharpe 1900, vol. I: 146)。

第35信　1771.

この信は短い書信 (Selborne, 1771) であるが、原本の日付が 'July 19, 1771' の書信（長文）の

一部である (Sharpe 1900, vol. I: 149)。なお、本書には、'July 19' の日付のある書信は認められない (Nicholson 1929: 37)。

第37信　1771.

本信は、'Sept. 25, 1771' 日付の原本書信の一部を成し、第2~4段落は追伸にある文章である (Sharpe 1900, vol. I: 154)。

第39信　Nov. 9, 1773.

Jardine (1853) は、"This with the following letter were written apparently at the request of Mr. Pennant for the use of his "British Zoology," in which they were used as the inferences show." (p. 78) とし、この書信と次の書信はペナント氏の所望に応じて書いた見せかけの書信で、同氏の『英国動物学』新版に引用されている。

第40信　Sept. 2, 1774.

前信と同様に大部分はペナント氏の所望に応じて書いた文章である。実際に発信されたのは第22段落 ("The note of the white-oat, … among the summer fruits.") である。July 8, 1773 の日付のある原本から取られたもので、残りの部分はバリントン氏第15信に転用されている。なお、この書信の第21段落 ("In the garden … they supported?") は、Samuel Barker 宛に Nov. 23, 1780 の日付で送られた書信の一部である。

第41信　n.d.

この信と後続信はペナント氏に宛てたものではない。出版を決めた後に補追された書信である (Sharpe 1900, vol. I: 175) 。また、文章の一部はバリントン氏宛書信から切り取ってペナント氏宛書信の一部として挿入したものである (Sharpe 1900, vol. II: 10)。

第42信　March 9, 1775.

第1段落末尾の文は、'March 19, 1772' 付のペナント氏宛書信の一部を改変したものである (Sharpe 1900, vol. I: 178)。

Allen (1900) は、"This letter is interesting as showing the comparatively limited range of ornithologists hardly more than a century ago. …". (p. 152) と註記し、1世紀ほど前には鳥類学者の研究範囲が比較的狭かったことを示していて興味深いと述べている。

第44信　Nov. 30, 1780.

本信は、日付は入っているが実際にペナント氏宛に送られたものではない (Allen 1900: 161)。

【バリントン氏宛書信】

第1信　June 30, 1769.

原本では、日付は July 6, 1769 である。Allen (1900) は、ペナント氏宛とバリントン氏宛の書信をどのように配列、編集するかの課題について言及している。2氏の書信を混成させ、発信年月日順に配列しているものもあるが、それは望ましくないと次のように述べている。

> … the whole character of the letters in the second series is different from that of the letters in the first. Pennant was a naturalist who wrote to White mainly for practical information; Barrington was a dilettante theorist who generally desired confirmation of his often hasty and sometimes inaccurate *à* priori ideas. It is, therefore, undesirable to mix up the two sets, both because of the difference of their original scope, and also because, in White's own judgement, it was best to keep the personalities separate. (pp. 165-166)

ちなみに、Jardine (1833, 1851)、Buckland (1875, 1876)、Brown (1856, 1890) などは、年月日付順で編集されている。Allen はこのような編集方針を批判したものである。これに対して、Jardine は年月日順に配列した理由を次のように述べている。

> As both series … were written simultaneously, and occasionally the same subjects discussed in each, it has been deemed proper to arrange the whole in Chronological order. (p. viii)

第2信　Nov. 2, 1769.

原本の日付は 'Nov. 9th' で、'Nov. 2, 1769' ではない (Sharpe 1900, vol. II: 1)。

第3信　Jan. 15, 1770.

第6段落は、原本ペナント氏宛第41信にある文章で n.d. ながらバリントン氏宛の書信として本書に転入させたものである (Sharpe 1900, vol. II: 10)。

第4信　Feb. 19, 1770.

この書信は、原本では前信の結節 'the conclusion' を成すものである (Sharpe 1900, vol. II: 11)。

第6信　May 21, 1770.

この書信は唐突に終わっている。原本には一時期、追伸が存在していたが、その部分は破り取られていて今は遺っていない (Sharpe 1900, vol. II: 19)。

第8信　Dec. 20, 1770.

各種鳥についての観察記録が原本にはあるが、ペナント氏宛第40信に入れられている (Sharpe 1900, vol. II: 27)。

第10信　Aug. 1, 1771.

大英博物館に原本が存在しない書信である (Sharpe 1900, vol. II: 36)。後で補追された可能性がある。

第12信　March 9, 1772.

原本では、次信に続く書信の一部である (Sharpe 1900, vol. II: 41)。

第13信　April 12, 1772.

原本では、バリントン氏宛第11信の続きである (Sharpe 1900, vol. II: 43)。

第15信　July 8, 1773.

原本では、各種鳥の観察等から始めているが、ホワイトはこれを本書のペナント氏宛第40信に転入させている (Sharpe 1900, vol. II: 48; Sharpe 1900, vol. I: 173)。

大英博物館には、'July 8, 1773' と日付が打たれた書信が2通ある。ペナント氏とバリントン氏にそれぞれ宛てたものである。出版が決まってから後に追補したペナント氏宛第40信の後半部にある段落にその一部がある。また、原本の日付と合致するバリントン氏宛第15信は、ペナント氏宛第40信に取り込んだ原稿の残りの部分である。'It looks as if the author originally economized his labour by sending the same letter on the say day to both his correspondents and solved the difficulties arising later by dividing it between them for publication.' (pp. 37-38) と Nicholson (1929) が述べているように、ホワイトは当初労を軽減するため同じ書信を同日に2氏に送っていたようである。

第16信　Nov. 20, 1773.

『王立学士会報』で訂正修補の上に公表したものである。

第17信　Dec. 9, 1773.

大英博物館には存在しない書信である (Sharpe 1900, vol. II: 58)。また、Nicholson (1929) は、この論文は1774年2月10日に同学会で読まれたと註記している (p. 259)。これらのことから、この書信は実際にバリントン氏に送ったものではないだろう。

第18信　Jan. 29, 1774.　第20信　Feb. 26, 1774.　第21信　Sept. 28, 1774.

これら3書信は、『王立学士会報』で訂正修補の上で公表した文章である。なお、第21信の日付は 'Sept. 28, 1774' であるが、書信末の段落冒頭に、"On the fifth of *July*, 1775, I again untiled part of a roof over the nest of a ſwift." (White 1789: 186) とあり、書信の日付と矛盾する。Sharpe (1900) を始めどの刊本にも、この矛盾についての註は認められない。Jardine (1833: 209) と Jesse & Jardine (1851: 196) では、その理由は明記していないものの、この信末の文章はまるで後で加筆したように段落間に空行1行を入れている。また、市河 (1940) は、「1774年の日附の書信に1775年の事まで記してあるのは不思議であるが、この一節は校訂の際原著者が後から書き加えたものであろう。」(p. 377) と推測している。一方、西谷 (1958) は、「茲の日附けがこの第二十一信の日附けと矛盾するが、これは本書出版の際ホワイトが補追した為めであらうか。或は是れは、一七七五年七月五日と書くべきをホワイトが書き誤ったのではなからうか。ホワイトの日記や手紙を見ても一七七五年七月五日には此の事に該当する記事が一向に見えない。」(p. 344) と註を付している。加筆か誤りか、いずれが正しいかを断言するのは難しいが、この一節を前段落と切り離して編集している刊本があること、ホワイトの日記等にこの一節に該当するものがないこと、これらから推測すれば、後から加筆したものと取る方が合理的かもしれない。

第24信　Aug. 15, 1775.

バリントン氏の *Miscellanies* で 'On the prevailing Notions with regard to the Cuckoo' というタイトルで全文が引用されたものである (Jardine 1853: 138)。そこでは、'often-mentioned correspondent, the Rev. Mr. White of Selborne, in Hampshire.' と発信者を明記している (Bennett 1837: 287; Sharpe 1900, vol. II: 90)。

第30信　April 3, 1776.

Allen (1900) は、第2段落冒頭の 'Induced by this assertion, we procured a cuckoo, …' にある 'we' について、"Wherever White speaks thus in the first person plural, we may suspect the letter either of being an added one, or else of being largely cooked up for publication." (Allen 1900: 284) と述べ、1人称複数形 'we' を用いる場合、後で加えられた書信、あるいは作為的に書かれた書信ではないかとしている。事実、見せかけの書信であるペナント氏宛第2信、バリントン氏宛第21, 56, 61信などでも 'we' が確認できる。

第35信　May 20, 1777.

大英博物館に 'Selborne, June 13, 1777' という書信がある。その一部はバリントン氏宛第39信に、一部はペナント氏宛第12信に転入されている (Sharpe 1900, vol. II: 116)。ダーウィンの研究にも影響を与えたミミズの偉大な作為について報告している。なお、Miall & Fowler (1901: 172) には発信年の誤植 '1770' がある。

第36信　Nov. 22, 1777.

この書信の原本は、バリントン氏出版の論文 'On the torpidity of the Swallow Tribe, when

they Disappear.' の1つの記事として *Miscellanies* で発表されたものである (Jardine 1853: 153)。謝辞に 'I shall here subjoin a letter which I received from that ingeneous and observant naturalist, the Rev. Mr. White, of Selborne, in Hampshire.' とある (Bennett 1837: 310; Sharpe 1900, vol. II: 117)。この記事を本書に再掲したものである (Miall & Fowler 1901: 172)。

第38信　Feb. 12, 1778.

この書信は、日付は入っているが後に補追された可能性が高い。まず、追伸に 'The classic reader …'（読者諸氏は）という表現があること、次に、一人称複数形の 'we' が使われていること、文学的な文章であること、などがその主な理由である。

第39信　May 30, 1778.

原本で 'June 13, 1777' の日付のある書信の一部である。その残りはバリントン氏宛第12信に転用されている。

第41信　July 3, 1778.

Jardine (1853) は、"This letter in the original edition of 1780 concluded here, but in the 4to edition by Mitford what follows was added to it. This has appeared in all the editions subsequently as part of the original letter, but we are not aware at what time or under what circumstances this was written." (p. 163) と註を付し、信末の節は Mitford (1813) から加えられたものであるが、いつ、どのような状況でホワイトが書いたものであるかは不明であるとしている。

なお、この Jardine の註には2つのミスがある。1つ目は、'the original edition of 1780' とあるのは、正しくは、'the original edition of 1789' である。2つ目は、Bell (1877) が "The remainder of this letter does not appear in the first edition, but was added by his brother from the MS. of Gilbert on the publication of the 2nd edition in 2 vols. 8vo in 1802." (vol. I: 219) と註記しているように、この一節が加えられたのは Aikin & Markwick (1802) であり、Mitford (1813) からではない。なお、この Bell 註にもミスがある。Aikin & Markwick (1802) は「弟 his brother」が出版したとしているが、正しくは「甥 his nephew」である。

第43信　Sept. 9, 1778.

本信には日付が入っているが、バリントン氏宛に送られたものではない。このことを Allen (1900) は、"This is clearly not a real letter, but an additional essay on the notes of birds, written when the idea of publication had been adopted." と指摘している (p. 325)。

第44信　n.d.

Allen (1900) は、この書信と後続書信の多くは、実際バリントン氏宛に書かれたものではなく、ペナント氏宛書信の主題によって誘引された注釈であるとしている (p. 331)。それらには日付がない。

第50信　April 21, 1780.

『セルボーン』初版本では、「亀」に関する追加詳報は「古代遺物」末に採録されているが、後続刊本のほとんどではこの書信末に採録している。

第52信　Sept. 9, 1781.

発信日付と本文中の日付 ('in 1782,' Miall & Fowler (1901:207)) が一致していない。

第53信　n.d.

Allen (1900) は、"White here pretends to be still writing letters, but the pretence by this

time has become sufficiently transparent." と述べ、ホワイトは引き続き書信を書いているように装っているが明らかに実際に送ったものではないとしている (p. 395)。本文中に 'August the first, 1785' (Miall & Fowler 1901:209) の記述があるが直前書信の日付などとは大きく異なっている。また、"As many of my readers may …" ともあるので後で補追した書信に間違いない。

第54信　n.d.

Bennett (1837) によれば、この書信は *Gentleman's Magazine* 1786 (Vol. LVI, p. 488) に掲載されたもので、'The Letter was signed "V." and had the date of June 12.' とある (p. 366)。つまり、この書信は、実際にバリントン氏宛てに送られた書信ではなく、雑誌記事のためにホワイトが書いた文章を本書に再録したものである。

第56信　n.d.

出版のために後で補追された見せかけの書信で、冒頭の、"They who write on natural history cannot too frequently advert to instinct, …" でもわかるように文語的、文学的な響きがある。また、第30信で確認したように、補追信に特徴的な一人称複数形の 'we' 'us' も文中に見られる。

第61信　n.d.

放射熱・輻射熱に関する新発見を報告している。Allen (1900) は、そのことについて、"This is a first indication of the importance of radiation, and of the value of clouds as an earth-blanket, since so fully worked out by Tyndall." と述べ、雲がかかると気温が上がり、晴れると下がるという、「放射冷却現象」のことをホワイトはこの時代にすでに気づいていたと言う。また、ホワイトはこの書信の中で 'the author' という言葉を使用しているが、Allen (1900) は、"The phrase 'the author,' which occurs here and in some subsequent messages, indicate the unreality of these letters." (p. 385) と述べ、本当の書信ではなく書籍出版を企図した後に補追として書いた文章であろうとしている。ホワイトはバリントン氏宛第62信でも 'the writer' と 'the author' を使用している。

以上、各書信において特記すべき書誌情報について示してきた。次節では、これらの書信が具体的にどのような改変・修正の過程を経て成稿に至ったのかを検討していきたい。

3.2.4　書信の改変・修正

すでに見てきたように、本書『セルボーン』は見かけ上、ペナント氏宛44書信とバリントン氏宛66信、合計110信から構成されている。しかし、前節で見てきたように、たとえ日付が入った書信であっても、それは実際に2氏に送られたものではなく後で補追されたものであったり、中には宛先も実際とは異なる場合もあったりするなど、改変・修正が多岐にわたっている。Nicholson (1929) も、

The *Natural History* consists ostensibly of forty-four Letters to Pennant and sixty-six to Barrington. Of these many bear definite dates; others are undated and are simply essays written to cover the rest of the ground, after publication has been decided on. But, as we have seen, even the dated letters bear no close relation to the correspondence that originally passed. Several of the real letters are suppressed as trivial or irrelevant; the dates of others

> are altered for no apparent reason by anything from a day to a week (in one case a year); some are divided into two or three, others fused together without regard for chronological sequence or even the correspondent addressed.　(p. 38)

と述べているように、修正・改変の多くは、文体的理由からであろう (Nicholson 1929: 36)。では具体的にホワイトは、どのような改変・修正を行なったのか。以下、主なものを考察していきたい。

まず、字句の改変・修正が見られる。例えば、ペナント氏宛第17信では、原本では、'Your obliging letter dated May the 4th' とあるのを、本書では 'your agreeable letter of June the 10th' (p. 47) に修正されている。また、ペナント氏宛第22信では、原本では 'My brother Barker' が、本書では 'Mr. Barker' に改変されている (Sharpe 1900, vol. I: 97)。Mr. (Thomas) Barker (1722-1809) というのは、ホワイトの妹 Anne (1731-1807) の夫で義弟にあたる。次に、ペナント氏宛第23信では、原本では 'I cannot agree with Mr. Barker' となっているのが、本書では 'I cannot agree with those persons that asset' に修正している (Sharpe 1900, vol. I: 100)。さらに、バリントン氏宛第1信では、本文の 'last month' は、原本では 'In May' である (Sharpe 1900, vol. II: 1)。ペナント宛第10信では、'in the Haymarket' を本書では、'in Spring Garden' に修正している (Sharpe 1900, vol. I: 39)。これらの修正の多くは、私的な記述を極力避けようとしているホワイトの意図が見て取れる。また、ペナント氏宛第12信では、'is seen' を 'appears' に改変している。これは動物の活動実態を記録する上で重要な表現である。すなわち、ムシクイが飛ぶのを見たという記述であるが、ホワイトの真意は、その年最初の飛来を確認したという事実である。したがって、それを明確に表現できる後者に改変したのである (Nicholson 1929: 14)。

一般的に、『セルボーン』は手の加えられていない即興的な文章であると思われる節もあるが、実際には、成稿まで多くの労力をかけ、何度も修正を加えて成ったものなのである。そのことを Nicholson (1929) は次のように述べている。

> *Selborne* is commonly taken to be an artless and spontaneous composition; actually it was shaped with as much labour as any other work of art of equal importance. Passages were re-written and re-written again before the final form was attained. (p. 35)

そこで以下では、実際、ホワイトの書信原本 (Original version) と 本書の文章 (Final version) の1節を比較して、その改変・修正の実相を確認してみよう (Nicholson (1929: 33-36)。

ペナント氏宛第40信　Sept. 2, 1774. の1段落

Original version (Letter to Samuel Barker, Nov. 23, 1780)

> All I know about the sleep of fishes is, that at the Black-Bear-inn in Reading there is a stream in the garden which runs under the stables, and so under the road into the meadows; it is a branch of the Kennet. Now this water all the summer is full of carps, which roll about, and are fed by travellers, who divert themselves by tossing them crumbs, these fishes withdraw under the *stables,* and are invisible for months; during which period, I conclude, they must sleep. Thus the inhabitants of the *water*, as well as of the *air* and the *earth*, retire from severity of winter.

Final version (*Natural History of Selborne* — Letter XL to Pennant)

In the garden of the Black Bear Inn in the town of Reading is a stream or canal running under the stables and out into the fields on the other side of the road; in this water are many carps, which lie rolling about in sight, being fed by travellers, who amuse themselves by tossing them bread; but as soon as the weather grows at all severe these fishes are no longer seen, because they retire under the stables, where they remain till the return of spring. Do they lie in a torpid state? if they do not how are they supported?

まず、この原本は 'Letter to Samuel Barker' とあるように、ペナント氏に宛てたものではなくホワイトの甥に宛てたものである。それをペナント氏に宛てた書信として修正の上で第40信に転用したのである。最終稿の方が文学的な趣があるのは明らかである。

次に、実際に2氏のいずれかに送られた書信に見える改変・修正を検討していこう。好都合ながら、Sharpe (1900) は大英博物館に収蔵されている書信原本を折込としてその編註本に収めている。そこで、ホワイトは具体的にどのような編集作業を行ったのか、その修正の跡と彼の息づかいを体感するため、少し長くなるが1つの書信を例に取り、その全体を示してみたい。以下は、Sharpe (1900, vol. I: 40) 所収のホワイト書信の原本（複製）と White (1789) 初版との異同箇所を示したものである。「見せ消し ~~find~~」は原本から削除または訂正された箇所を示し、「括弧 [hear]」は修正、改変または追加後の表現等を示している。なお、初版の旧字体 ſ (ſmall) はすべて現字体 s (small) に変更している。ペナント氏宛第12信である。

~~Nov:~~ [November] ~~4~~[6[,] 1767. ~~Selborne near Alton Hants~~

SIR,

It gave me no small satisfaction to ~~find~~ [hear] that the ~~F~~[f]alco[s] ~~which I sent you proved as~~ [turned out an] uncommon one. I must confess I should have been better pleased to have heard that I had sent you a bird that you had never seen before: but that, I find, would be a ~~most~~ difficult ~~thing to do~~ [task].

[[s] This hawk proved to be the *falco peregrinus;* a variety.]

I have procured some of the mice mentioned in my former letters, a young one, ~~&~~ [and] a female with young, both of which I have ~~secured~~ [preserved] in brandy. From the colour, shape, size, ~~&~~ [and] manner of nesting, I ~~seem to~~ make no doubt but that ~~they are~~ [the species is] non-descript ~~species~~. They are [much] smaller ~~&~~ [, and] more slender, than the *mus domesticus medius* ~~*vulg: seu minor*~~ of *Ray*; ~~their eyes not so prominent; their ears naked, & standing out above the fur: their tails long, & sparingly covered with hair: their back is taller than that of the *mus domesticus medius* of Ray, & more inclinable to the dormouse aspect:~~ [and have more of the squirrel or dormouse colour:] their belly is white:; a straight line along their sides divides the ~~colours~~ [shades] of their back ~~&~~ [and] belly. They never enter into houses; are carryied into ricks ~~&~~ [and] barns in [with] the sheaves; abound in harvest; ~~&~~ [and] (~~which seems to be their best specific distinction~~) build their nests ~~between~~ [amidst] the straws of the ~~standing~~ corn above the ground~~; &~~ [, and] sometimes

in thistles. They breed as many as eight at a litter, in a little round nest composed of the blades of ~~grasses~~ [grass or wheat].

[One of these nests I procured this autumn, most artificially platted, and composed of the blades of wheat; perfectly round, and about the size of a cricket-ball; with the aperture so ingeniously closed, that there was no discovering to what part it belonged. It was so compact and well filled, that it would roll across the table without being discomposed, though it contained eight little mice that were naked and blind. As this nest was perfectly full, how could the dam come at her litter respectively so as to administer a teat to each? perhaps she opens different places for that purpose, adjusting them again when the business is over: but she could not possibly be contained herself in the ball [w]ith her young, which moreover would be daily increasing in bulk. This wonderful procreant cradle, an elegant instance of the efforts of instinct, was found in a wheat-field suspended in the head of a thistle.]

A ~~Gent:~~ [gentleman,] curious in birds, wrote me word that his servant had shot one last *January*, in that severe weather, which, he believed~~;~~ would puzzle me. I called to see it this summer, not knowing what to expect: but, the moment I took it in hand, I pronounced it ~~to be~~ the [male] ~~*G*~~*garrulus* ~~*B*~~*bohemicus* or *German* silk-tail, from the five [peculiar] crimson tags~~;~~ or points which it ~~has~~ [carries] at the ends of five of the short remiges. It cannot, I suppose, with any propriety, be called an *English* bird: ~~&~~ [and] yet I see, by *Ray's* ~~*Philos*~~: [*Philosoph.*] ~~l~~[*L*]*etters*,~~–~~that great flocks of them, feeding on haws, ~~were seen~~ [appeared] in this kingdom in the winter of 1685.

The mention of haws puts me in mind that there is a total failure of that wild fruit, so conducive to the support of many of the winged nation. ~~The case is the same with regard to acorns & beech-mast.~~ For the same severe weather[, late] in the spring, which cut off [all] the produce of the more tender ~~&~~ [and] curious trees, destroyed also that of the more hardy ~~&~~ [and] common.

Some birds, haunting with the missal-thrushes, ~~&~~ [and] feeding on the berries of the yew-tree, which answered to the description of the ~~*M*~~[*m*]*erula torquata* [or *ring-ousel*,] were lately seen in this neighbourhood. I employed some people to procure me a specimen, but without ~~any~~ success. [See Letter VIII.] ~~This species of *Merula* belongs properly speaking to the northern & more mountainous countries; & has nothing to do with Hant but by accident.~~

~~Quee:~~ [*Query*…..] Might not *Canary* birds be naturalized to this ~~C~~[c]limate, provided their eggs were put, in the spring, into the nests of some of their congeners, ~~such~~ as [goldfinches, greenfinches,] ~~sparrows, chaffinches,~~ &c.? ~~b~~[B]efore winter perhaps they might be hardened, & [and] able to shift [for themselves].

About ten years ago I used to spend some weeks yearly at Sunbury, which is one of those pleasant villages lying on the *Thames,* near *Hampton-court*. In the autumn, I could not help being much amused with those myriads of the swallow kind ~~(I might perhaps say millions)~~ which ~~used to~~ assemble in those parts~~!~~. But what struck me most was, that, from the time they began to congregate, forsaking the ~~chimneys,~~ [chimnies] ~~&~~ [and] ~~eves of the~~

houses, they roosted ~~a~~ [every] night~~s~~ in the osier-beds of the ~~aights~~ [aits] of ~~the~~ [that] river. Now this resorting towards ~~the water~~ [that element,] at that season of the year, seems to give some countenance to the ~~N~~[n]orthern opinion [(strange as it is)] of their retiring under water. A *Swedish* ~~N~~[n]aturalist is so much persuaded of that fact, that he talks, in his ~~C~~[c]alendar of *Flora*[,] as familiarly of the ~~S~~[s]wallow's going under water in the beginning of ~~*Septemr:*~~ [*September*,] as he would of his poultry going to roost [a little] before sunset.

An observing ~~Gent:~~ [gentleman] in *London* writes me word that he saw ~~a~~ [an house-] martin, on the ~~23rd~~ [twenty-third] of last ~~*Octobr*:~~ [*October,*] flying in and out of it's nest in the Borough. And I myself, on the ~~29~~th: [twenty-ninth] of last ~~month~~ [October] (as I was travelling ~~thro~~ [through] *Oxford*), saw four or five swallows hovering round, ~~&~~ [and] settling on the roof of the ~~C~~[c]ounty-hospital ~~of that City~~.

Now is it likely that these poor little birds (which perhaps ~~have~~ [had] not been hatched but a few weeks) should, at that ~~very~~ late season of the year, ~~&~~ [and] from so midland a county, attempt a voyage to *Goree*~~*~~ or *Senegal,* almost as far as the ~~*E*~~[*e*]*quator*~~*~~?

I acquiesce entirely in ~~yr~~ [your] opinion~~;~~ — that, ~~tho:~~ [though] most of the swallow kind ~~do~~ [may] migrate~~;~~, yet that some do stay behind~~, &~~ [and] hide with us during the winter.

~~*~~[t]See Ada~~m~~[n]son's voyage to Senegal.

As to the short-winged soft-billed birds, which come trooping in such numbers in the spring, I am at a loss even what to suspect about them. I watched them narrowly this year, ~~&~~ [and] saw them abound till about Michaelmas~~s~~, when they appeared [no longer]. Subsist they cannot openly among us, ~~&~~ [and] yet elude the eyes of the inquisitive: ~~&~~ [and], as to their hiding, no man pretends to have found any of them in a torpid state in the winter. But with regard to their migration, what difficulties attend that supposition! that such ~~weak,~~ ~~&~~ [feeble] bad fl~~y~~iers [(who the summer long never flit but from hedge to hedge)] should be able to traverse vast seas~~;~~ ~~&~~ [and] continents in order to ~~attain~~ [enjoy] milder ~~climes~~ [seasons] amidst the regions of *Africa!*

~~As to what I sent you word about the *lampetra ceca* being found in our streams, I desire to extract it; having reason to suppose that those I saw were the *lampetra parva*, & *fluviatilis* of Ray. Nothing would vex me more than to find I had misted by my inaccuracies a Gentleman who intends to favour the world with his researches into natural History.~~

~~Loches abound in the stream that runs by Ambersbury in Wilts: & that rare fish the rudd or finscale I have seen procured from the Chaswell near Oxford.~~

~~Begging the continuancy of yr most agreeable correspondence I conclude with great esteem.~~

~~P.S: What parts of England does the goss-hawk frequent?~~

~~Your most obedient Servant,~~

~~Gil: White~~

まず注目すべきは、'which I sent you proved as' を 'turned out an' に修正したり、'thing to do' を 'task' に改変したりするなど、文語的な文体に修正していることである。また、記号 '&' を 'and'

にスペルアウトしたり、‘Gent:’ や ‘tho’ をそれぞれ ‘gentleman’ と ‘though’ に修正するなどの配慮も怠らない。また、第3段落は丸ごと補追されたもので、一方、書信末の数行と結語は削除されている。後者は明らかに私的な要素を排除する目的であろう。

このように削除された部分はかなりの量に及ぶ。Sharpe (1900) は自身の刊本に、原本から削除された箇所を [　] 記号ですべて示している。以下は、Sharpe 本に示された削除箇所（段落等）とその行数（1行は10語程度）を示したものである。

【ペナント氏宛】

第1信～第9信　なし
第10信　第1段落（11行）
第11信　第1段落（3行）、末尾1段落（3行）、結語
第12信　末尾1段落（2行）、結語、追伸（2行）
第13信　末尾1段落（5行）、結語、追伸（3行）
第14信　なし（2分割した書信の前半部）
第15信　第1段落（13行）、末尾1段落（17行）、結語（2分割した書信の後半部）
第16信　第1段落（9行）、結語
第17信　第1, 2段落（17行）、末尾1段落（6行）、結語
第18信　末尾4段落（23行）、結語
第19信　第1, 2段落（17行）、末尾4段落（38行）、結語、追伸（2行）
第20信　第1~4段落（71行）、第7段落（3行）、結語
第21信　第1~3段落（31行）、結語
第22信　第1段落（6行）、第6段落（10行）、第8段落（17行）、第12段落（6行）、結語、追伸（1行）
第23信　第1, 2段落（31行）、第8~12段落（41行）、結語
第24信　第1, 2段落（11行）、末尾1段落（3行）、結語
第25信　第1段落（19行）、第6段落（5行）、第8, 9段落（20行）、末尾2段落（7行）、結語
第26信　第2段落（2行）、第13段落（7行）、末尾1段落（5行）、結語
第27信　第1, 2段落（29行）、第5段落（3行）、結語
第28信　第1~3段落（35行）、結語
第29信　なし
第30信　第1, 2段落（14行）、末尾1段落（19行）、結語、追伸（3行）
第31信　第1, 2段落（11行）、第6段落（5行）、末尾1段落（7行）、結語
宛第32信　第1~10段落（63行）、末尾2段落（4行）、結語
宛第33信　なし（原本のない書信、補追したもの）
第34信　第1~5段落（63行）、末尾3段落（16行）、結語
第35信　第1~4段落（41行）、末尾3段落（17行）、結語
第36信　なし
第37信　第5~8段落（37行）、結語（先信の一部、第2~4段落は追伸にある文章）
第38信　結語
第39信 ~ 第44信　なし

【バリントン氏宛】

第1信　結語、追伸（3行）
第2信　末尾1段落（7行）、結語
第3信　なし
第4信　末尾段落の途中から4行、結語
第5信　第1段落途中まで3行、第11段落（4行）、末尾2段落（14行）、結語
第6信　なし
第7信　第1段落の途中まで3行、第2段落（11行）、第5段落（7行）、結語
第8信　末尾3段落（12行）、結語、追伸末の2行
第9信　第1段落の途中まで5行、末尾段落（16行）、結語、追伸（3行）
第10信　なし（原本なし）
第11信 ~12信　なし
第13信　結語、追伸（3行）
第14信　なし
第15信　結語、追伸（3行）
第16信 ~ 第65信[10]　なし

特徴的なのは、1つ目は、改変・修正のない書信は確かにあるものの（76信）、多くの書信では冒頭と信末の段落が削除されていること、2つ目は、多いところでは12段落や74行も削除されていること、3つ目は、ペナント氏宛書信の修正・改変率 (25/44, 56.8%) は、バリントン氏宛書信のそれ (9/66, 13.6%) よりも圧倒的に大きいことである。この事象の要因については、今後の調査結果を待たなければならないが、ペナント氏宛書信は、比較的インフォーマルなタッチで出版を意識せずに書いた書信が多かったために後で手を加えざるを得なかったのかもしれない。

3.2.5　各種刊本における註の付し方と内容

『セルボーン』の各種刊本の一大特長は、何と言ってもそれぞれの註の付し方（脚註、尾註など）や内容である。言うまでもなく、それぞれの特徴や内容の相違点などを正確に把握するには実見による他ないが、ともあれ本節では便宜上、1920年代末までに世に出された代表的な刊本における註の有り様を簡単に示してみたい。

Aikin & Markwick (1802)

脚註方式で、ホワイトによる原註のみを掲出している。例えば、ペナント氏宛第1信の ‘Well head’（泉）についての註では（‘ſ (long s)’ は ‘s’ に変更）、

> This spring produced, September 14, 1781, after a severe hot summer, and a preceding dry spring and winter, nine gallons of water in a minute, which is five hundred and forty in an hour, and twelve thousand nine hundred and sixty, or two hundred and sixteen hogsheads, in twenty-four hours, or one natural day. At this time many of the wells failed, and al the

[10] 1789年初版は誤って第62信を第61信としてしまったため、第61信は2信ある。そのため、最終信は本来であれば第66信とすべきところ第65信と誤ってしまったものである。Sharpe (1900) はそのミスに気づいてはいたが、ホワイト初版を尊重してかミスのままに書信の番号を付したものである。

ponds in the vales were dry. (p. 5)（1781年9月14日、酷暑を極めた夏とその前の乾燥した春と冬のあとにも関わらず、この泉は1分間に9ガロンの水を放出した。その量は、1時間に換算すると540ガロン、24時間すなわち丸1日では2960ガロン、あるいは216樽となる。当時、多くの泉が涸れ、谷間の池は乾上った。―筆者訳）

と記している。

Mitford (1813)

原註は脚註で、編註者の註は、‘Observations on Some Passages in Mr. White’s Natural History of Selborne’ の部に巻末方式で掲載されている。これが、いわゆる Mitford の註 (Notes) である。‘Page 7. There is a village in the west of England remarkable for the quantity it possesses of the “Cornu Ammonis. …” のように、特定項目ではなく該当ページを挙げて註を付す形をとっている。註の数はそれほど多くなく、24の註にとどまっている。1825年本の尾註内容はこの1813本とまったく同じである。

Jardine (1833)

脚註方式で、ホワイトの原註を付し、かつ編註者のイニシャル W. J. を編註者註に付している。1/2ページ程度を割いた註が多い。博物学に関する比較的専門性の高い内容の註である。“Mr. Yarrell of London … hints at …” のように、他の博物学者の知見を間接引用したり、ホワイトの博物学上の功績を評価する記述が散見される。例えば、ホワイトが大型コウモリを国内で初めて確認したとして、

Mr. White has the merit of first noticing this species in England: it is the *vespertilio noctule* of Dr. Fleming, and said by that naturalist to winter in Italy. ― W. J. (p. 107)

と註記している。また、鳥類に関する註が詳しい。例えば、バリントン氏宛第37[38] 信では、‘cross-beaks’（イスカ）について、ほぼ3ページにわたって詳しい註を付している (pp. 130-133)。史的書誌情報の節で述べたが、Jardine が註を付したようになってはいるが、彼は直接関与していない。また、この刊本は発信年月日順に書信が配列されている。

Rennie (1833)

脚註方式で、編註者 (J. Rennie) と Hon. and Rev. W. Herbert、Robert Sweet による註を採録している。

Bennett (1837)

脚註方式で、他の編註者 Rennie, W. Y. (Yarrell), Mitford, W. H. (Herbert), G. D. (Daniell), R. O. (Owen), T. B. (Bell) らから直接引用することも多く、大部の註で構成されている。中には、本文はわずか2行のみで残りはすべて註のページもある。書信全体を見ても、本文の量に相当するか、内容によっては本文量を凌ぐ量の註を付している。例えば、ペナント氏宛第34信 (pp. 146-153) やバリントン氏宛第3信 (pp. 198-210) は圧巻の量である。博物学に関する詳細で専門的な註である。Bell (1877) と同様に、後続の刊本に与えた影響は大きい。

Brown (1856, 1890)

脚註方式で、原著註と編者註 (Ed.) を * † ‡ 記号で示している。ほぼ全ページに、*Magazine of Natural History* の記事や Rennie や Bell らの各種博物書から動物の習性などに関する情報を直接、間接に引用するなど、かなり詳しい註を付している。多い箇所では、本文に匹敵するほどの註が見られる（例えば、ペナント氏宛第17信 (pp. 42-47)）。

Jesse & Jardine (1851)

脚註方式で、原註の他、Ed. (Edward Jesse 編集と註) 及び W. J. (Jardine 補註)、Rev. Mitford, E. T. B. (Bennett), R. O. (Owen), T. B. (Bell) らの註から多数直接引用している。ページの半分を占める註も見られる (p. 26)。さらに、巻末には Jardine による、主として鳥類に関する詳細な補註 (pp. 393-407) と編者 Jesse の補註 (pp. 407-411) が採録されている。

Jardine (1853)

脚註方式で、ホワイトによる原註と Jardine による註で構成されている。Blyth, Bingley, Yarrel[l], Bennet[t], Bell らの註や他の書物からの間接引用が散見される。1ページあたり7行程度から15行程度の註である、比較的前半部、すなわちペナント氏宛書信に対する註の方がバリントン氏宛書信のそれよりも多い印象である。1833年本や1851年本で付されている註を大幅に加筆修正している。なお、Jardine 註の中で、書誌に関する以下の註は特に重要である。

> Mr. White seems to have adopted no plan or rule in arranging the subjects of these letters. They are taken up as they occur or have been observed. This may have its advantages, as recording the observations when freshly made, or before the memory had failed, but a correspondence or journal kept in this way would almost require for the sake of convenience to have the subjects brought more together. Thus there are frequent observations afterwards upon the forestry of Selborne, white here we have now only some of the more remarkable trees noted. (p. 4)

つまり、ホワイトは、書信に取り上げる話題については無計画で特段の決め事があるわけではないが、それにはメリット、デメリットの両面があることを述べたものである。なお、この刊本には、Yarrell を Yarrel としたり Yarrell としたり、Bennett を Bennet とするなど人名の綴りの不統一が見られる。

Buckland (1875, 1876, 1887)

脚註と尾註の方式をとっている。註者は、White, Mitford, Markwick などと註末に示して区別している。脚註は1~2行程度の簡潔明瞭の内容であるが、尾註は大部で130ページを超えているも、出版社からは150ページを超えないように指示されていたようである (vol. I: ix)。この註は、本文理解を促すためのものというよりも、寧ろ註者の興味関心領域に基づく百科事典的なもの、あるいは Buckland 自身の個人の経験などに関する記録と言えるだろう。例えば、セルボーン地方に ‘Wolmer’ という森があるが、その語源についてまず、‘Wolf mere’ あるいは ‘Wolvemere’ が転訛したものという Harting の説を紹介した後で、イギリスにおけるオオカミの存在は、『赤ずきんちゃん』の物語によって証明されていて、「1680年にエヴァン・キャメロン卿によって殺され、剥製標本として用意された英国における最後の種である有名なオオカミが今も現存し、良好な保存状態に

あるのかどうか、誰か教えていただけませんか？」と出ているとか、アイルランドでは、オオカミの駆除に関する教区の記録が前世紀まで遡る、などと述べている (Buckland 1876, vol. II: p. 31)。註というよりは、博物学に関する1つの独立した読み物と評価することも可能かもしれない。

Harting (c1875)

脚註方式をとる。編註者註 (Ed.) と 原註 (G. W.) を付している。他者の註を間接引用として要約して註に付しているものが多い。コンパクトにまとめながらも要を得た内容である。1ページ平均7行程度の註がありが、中には1ページの8割程度を占める註 (p. 21) もある。

Bell (1877)

脚註方式をとる。編註者の註は * 印で示し、［　］で表示して末尾に編註者のイニシャル (T. B. (Thomas Bell)) を付している。原註はアルファベットで註番号を付し、E. T. B. (Edward Turner Bennett) からの直接、間接の引用が多数認められる。1ページに10行程度の註 (p. 27) が平均的である。専門的な立場からの博物学に関する註が多い。各書信の冒頭において書誌的な情報にも所々で触れている。Bennett (1837) と同様に、後続の刊本に与えた影響は大きい。

Davies (c1879)

尾註方式をとる。原註は * で、編註者の註は算用数字で表している。1つの註につき2~3行程度の簡潔な内容である。ただし、1ページ (p. 41) や数ページ (pp. 33-36) にわたる註もときに見られる。他の博物学者らの註は採用してない。なお、Davies は序文の中で、註に関して次のように述べている。

> The present Editor has done his best to limit the use of notes (a nuisance at the best) to as few as might be consistent with the present advanced state of knowledge, not forgetting the Publishers' kindly warning that "the Editor should not make himself of more moment than the original author. (pp. IX-X)

すなわち、註というのはいくらよく見ても読みを妨げることもあるので、現在の最先端の知識の状況に合わせつつ、編者が原著者よりも際立つことのないようにという出版社からの注意に基づき、註を最低限に抑えたという。

Blackie (1895)

脚註方式を採用している。原註 (W.) と編者註を算用数字で表示している。若年層向けの刊本であるためか、1~2行程度の必要最低限の註に留めている。

Allen (1900)

脚註方式をとっている。編者註 (Ed.) は算用数字で、ホワイトの註は (*) で表示している。5~10行程度で、簡潔な註である。当該書信が実際に発信されたものではなく後で書かれた見せかけの書信 (made-up letter) であることなど、書誌に関わる重要な記述が見られる。また、博物学に関するホワイトの誤解を訂正したり ("White is mistaken, I need hardly say, …" p. 37)、原著内容を批判したり ("This opinion is now known to be quite erroneous." p. 56) する註も散見される。

Sharpe (1900)

脚註方式である。算用数字で註番号を付し、末尾に [R. B. S. (R. Bowdler Sharpe)] [G. W. (Gilbert White)] などと註記者名を示している。各ページにほぼ10行程度、多い場合には1/2ページの非常に詳細な註を付している。Bell (1877) からの間接、直接の引用が最も多い。Harting (c1875) からの間接引用も見られる。また、Jardine (1853) からの引用も多く、15行にわたる長文の直接引用もある。この註で最も重要なのは、書誌に関する情報が群を抜いて詳しいことである。原本からの字句の改変や、日付の変更、原本からの表現の修正などの情報を数多く掲載している。

Miall & Fowler (1901)

脚註方式である。すべて算用数字で番号を付し、編註者のものは末尾に［　］を付している。1ページあたり5~15行程度の内容で、博物学関係の書物から引用するなど簡潔でありながら要を得た内容の註である。Bell (1877) 註の援用が多い。Harting (c1875) の引用も見られる。書内を相互に参照しやすいように相互参照用の註も多い。

Nicholson (1929)

ホワイトの原註は脚註方式で、編註者の註は尾註方式である。1/2ページから1.5ページ程度の簡潔で的確な内容である。他の博物者の知見を間接的に引用してるものの、『セルボーン』他刊本からの直接引用は認められない。Nicholson の註で特筆すべきは、編者序文において註を構成する際の原則を以下のように明言している点である。

- They are to be kept as concise as possible.
- They are not to explain or describe anything which does not definitely help towards an understanding of the passage in question.
- They are to warn the reader against observations or deductions now known to be incorrect.
- They are to give, where an author now little known is quoted by Gilbert White, his period and scope, and also some idea of his character and his reputation at that time, such as any well-informed reader must have had when Selborne was first published. (p. 13)

註はできるだけ簡潔にすること、問題箇所の理解に確実に役立つもの以外説明したり記述したりしないこと、現在では間違っている観察や推論結果について読者に注意を向けること、そして今ではほとんど知られていない作家の言葉をホワイトが引用している場合、その時代や活躍範囲の情報や、『セルボーン』初版が出版されたときに知識豊富な読者なら誰しもが知っていただろう、当時のホワイトの性格や評判についての情報を提供すること、これらを念頭において註を付すとしている。例えば、第3に関連する例として、ペナント氏宛第21信の以下の註（冒頭部）があげられる。

The apparent error of writing for observations on stone-curlew migration at a season when all but a few stragglers have long gone south is due to a curious alteration in the text; … (p. 146)

イシチドリの渡りに関する観察記録は明らかな誤りであり、本文の奇妙な変更に起因することを述べたものである。

Nicholson はまたこれら以外にも、ラテン語の文章をホワイトが引用している場合には必要に応じてその英語訳を付すこと、ホワイトが言及している鳥などの種が何であるか不明な場合に

は脚註にそれを示すこと、註で取り上げた種、名称、場所、一般事項のページを巻末の索引で示していること、これら3点を補足として編者序で述べている。このように、Nicholson の註の方針は明確で簡潔でありながらも要を得たものになっている。

以上、刊本によって註の付け方や内容、分量等は様々であることを見てきた。ホワイト著『セルボーン』の書誌の全容や博物学の知識などを理解する上では、これらの刊本における註を詳しく研究することも今後必要になるだろう。ただし、Davies (c1879) が注意しているように、註はあくまでも本文の補足的機能を持つものであり、『セルボーン』の本体である本文をまずはしっかり理解することが何よりも肝要であることを忘れてはならない。

3.2.6 誤植等のミス

最後に、本書『セルボーン』には、初版を含め各種刊本には様々なミス箇所がある。本書の体系的書誌を明らかにする上では不可欠な点である。以下、5つの観点から本書の誤謬実態をまとめる。

1）書信番号のミス

1789年初版に見えるミス（バリントン氏宛第61信 n.d.）である。初版本 (1789) では、この信も前信も「LXI 第61信」と番号が振られている。本来であれば、「LXII 第62信」とならなければならない。以降、番号が1つずつズレている (Sharpe 1900, vol. II: 192)。1789初版本を確認すると、p. 287と p. 291に LXI というローマ数字が確認でき、以降、誤ったまま連番が付され、最終信は LXVI となるべきところ LXV (p. 303) となっている。Aikin & Markwick (1813) では LXVI と正しいが、次に出版された Mitford (1802) では初版のミスを引き継いでいる。

本書を日本語に翻訳した壽岳 (1949) もこのミスに気づいていた。「原版ではこの書簡が第六十一信とあやまり數へられ、以下順次番號が一つづつずれてゐる。」（壽岳 1949, 下巻 : 264）と指摘している。

次に、バリントン氏宛第32信の誤謬である。Wood (c1853) と Blackie (1895) では信番号の奇妙なズレが起こっている。いずれもバリントン氏宛第32信が欠落し、そのため以降書信番号が1つずつズレていて最終書信が第65信となっている。単なるミスなのか、あるいは何か特別の理由があるのかは現段階では定かでない。

また、Jardine (1833) は2氏の宛先順ではなく発送日付順に再配列されているが、同じ信番号が付されているものが2信ある。ペナント氏宛第 XXXVII (37) 信 (Sept. 14, 1770) (p. 126) と後続のバリントン氏宛第 XXXVII (37) 信 (October 8, 1770) (p. 127) である。その直後の信番号は正しくペナント氏宛第 XXXIX (39) 信 (Oct. 29, 1770) (p. 134) となっているので最終信の番号も正しくバリントン氏宛第 CX (110) 信 (n.d.) (p. 330) となっている。

2）1789初版の Errata In The History of Selborne.（1p）（18箇所の誤植ミス）

ここでは18箇所すべてを取り上げないが、例えば、‘Antiquities’ 第10信末 p. 352 の12行目の ‘esteemed’ は、正しくは ‘deemed’ である。ただし、同ページの11行目にも ‘esteemed’ が使われており、Mitford (1813) では、11行目を ‘deemed’ に修正し、12行目の ‘esteemed’ はそのままになっている。この誤りは、Rennie (1833)、Blyth (1836)、Jardine (1853)、Harting (c1875)、そして Bell (1877) などに引き継がれている。

なお、初版本には以下のページ番号と背丁の誤植も見られる。

（誤）262 （正）292
（誤）389 （正）398
（誤）441~442 が欠落しているが、文章は欠落せずに繋がっている。したがって、p. 443 となっているのは、正しくは（正）441で、以降のページ番号は順に繰り下がる。
（誤）Pp2 （正）Ppp2 Index 部の背丁（せちょう、各ページの下に折り順の番号を示す記号））

3) 註における書信番号ミス

1789年初版のペナント氏宛第8信 (n.d.) の第1段落末の註（割註あるいは脚注）にある '[For which conſult letter XLII. to Mr. Barrington.]' (p. 22) とあるのは誤りで、書信の内容（植物に関する文章）から判断すると、正しくは ' [For which conſult letter XLI. to Mr. Barrington.]' である。Sharpe (1900) はさらに、"The original edition says 'Letter XLII,' and this mistake is copied by Bell and other editions." と註記し、このミスは後継刊本にも受け継がれているとしている (vol. I: p. 28)。Aikin & Markwick (1802: 39)、Mitford (1813: 22)、Rennie (1833: 25)、Blyth (1836: 19) もこの誤りを継承している。Bennett (1837: 33)、Jenyns (1843: 25)、Jardine (1853: 20)、Jefferies (1887: 22) 、Sharpe (1900, vol. 1: 28) では正しく表記されている。その他、Miall & Fowler (1901) では、'(for which consult Letter XLII. To Mr. Barrington)' と誤りのままになっている。Blackie (1895) の脚注では、'See letter XLI. To Mr. Barrington.' (p. 27) と正しく表記している。Nicholson (1929) では、'(for which consult Letter XLII. to Mr. Barrington).' (p. 99) と誤りを継承し、Jardine (1833: 33) 及び Jesse & Jardine (1851: 32) では、書信配列は年月日順であるが、正しくは 'Letter LXXXIII' のところ、'For which consult Letter LXXXIV. to Mr. Barrington.' とそれぞれ誤っている。Harting (c1875) では、'[For which, consult Letter XLI. to Mr. Barrington.]' (p. 27) と正しい信番号を付している。Davies (c1879) でも同様に正しい表記となっている (p. 24)。この註を削除しているのもいくつか見られる（Buckland (1875, 1876, 1887), Wood (c1853), Morse (1896) など）。

なおついでながら、Miall & Fowler (1901) を底本として訳出した西谷 (1958) は、「これ等の植物に就いてはバリントン氏あて第四十一信を参照されたい。」(p. 35) と誤りを訂正して訳出している。西谷 (1958) に先行する訳本では、山内 (1948) は、「（この事につきましては、バリントン氏への第四十一信を御参照ください。）」（上巻、p. 37）と正しく、一方、壽岳 (1949) は、「（これらのことについては、バリングトン氏あての第四十二信を参照されたし。）」（上巻、p. 54）と誤りのままになっている。

4) 句読点のミス

Allen (1900) は、1789年初版で生じた、ペナント氏宛第1信第4段落末に見られる興味深い句読点の誤植を次のように指摘している。

> In all the editions I have seen, the first included, this sentence and the previous one are made unintelligible by placing a full stop at the word "north" and omitting the comma at "other" and "stream." I have restored the passage as the author obviously intended it to read. Here and in several other places, indeed, I have ventured to amend the text by

correcting what I take to be evident printer's errors in the first edition. (Allen 1900: p. 5)

この誤植について筆者が調査したところ、各種刊本には正しい解釈が可能な [B] [C] タイプを含めて以下の4タイプがあることがわかった。

[A] … the British Channel: the other to the north. The Selborne stream makes one branch …
[A'] … the British Channel; the other to the north. The Selborne stream makes one branch …
[B] … the British Channel: the other, to the north, the Selborne stream, makes one branch …
[C] … the British Channel: the other to the north, the Selborne stream, makes one branch …

[A] タイプは1789年初版 (p. 3) に始まり、Aikin & Markwick (1802: 5)、Mitford (1813: 3)、Jesse (1851: 15)、Rennie (1833: 4), Buckland (1875: 3, 1876: 3, 1887: 2)、Jefferies (1887: 5)、Davies (c1879: 5)、Sharpe (1900: 3、Allen の訂正註を評価する註を付している) に認められる。[A'] は 'Channel' 後のコロン (:) かセミコロン (;) かの違いである。後者の例は Jardine (1933: 13)、Blyth (1836: 3)、Jenyns (1843: 4)、Brown (1890: 3)、Wood (c1853) などに認められる。いずれも 'north' の後にコンマがあるのは標準的な英文ではない。[B] タイプは Allen (1900: 5) と Bennett (1837: 4) に認められ、そして [C] タイプは、Harting (c1875: 3)、Miall & Fowler (1901: 3)、Nicholson (1929: 78) に認められる。文脈から判断すれば、[B] [C] いずれも英文としては可能であろう。

5) 旧活字体から発生した語の取り違いによるミス

Jardine (1853) のバリントン氏宛第47信 (n.d.) 第2段落 (p. 174) に興味深いミスが見られる (Martin 1934: 142)。それは、'These crickets are not only very thirsty, but very voracious;'（「このコホロギは、渇きを覚えることが甚だしいばかりでなく、空腹を覚えることも甚だしい虫であります」(西谷 1958: 461)）とすべきところを 'These crickets are not only very thrifty, but very voracious;'（「このコホロギは、倹約を覚えることが甚だしいばかりでなく、空腹を覚えることも甚だしい虫であります」）として不自然な文になっている。Martin (1934) によると、このミスは、初版で使用された古い活字 'ſ' (long s) を 'f'（エフ）と取り違えたことに由来するものだろうとしている (p. 142)。管見の限りでは、このミスが見られる刊本はこの Jardine (1853: 174) の他に Davies (c1879: 248-249) と Morley (1887: 131)、Blackie (1895)、Morse (1896: 211) の4本のみである。一方、Mitford (1813: 254) をはじめ、Jardine (1833, LXXXIX: 279)、Rennie (1833: 282-283)、Blyth (1836: 223)、Jenyns (1843: 324)、Jesse & Jardine (1851, LXXXIX: 256-257)、Brown (1890: 236)、Buckland (1876: 244, 1887: 220) などでは正しく 'thirsty' となっている。

このように各種刊本には様々な誤謬が見られるが、初版で発生して後続の刊本に継承されたものや印刷上のミスや書信の番号に関するミスなど、後続刊本で新たに発生したミスなども含まれることが明らかになった。

4．終わりに

ホワイト著『セルボーン』初版は今から235年前の1789年に出版され、今なお註の様式や内容が異なる夥しい数の刊本が英国内外で読み続けられている。しかし、書簡形式という特異な構成や成

立過程の複雑さ、刊本の多さなどにより、その書誌を網羅的、統合的に記述するのはそう簡単ではない。本稿では、2つの書誌タイプ、すなわち史的と体系的な観点から、特に他の刊本に影響を与えた重要な刊本などが数多く出版された1920年代末までの刊本を検討してきた。当初の目的を充分に達成できたかと問われるならば些か自信はないが、散在する各種書誌情報を可能な限り統合的に1つにまとめようとした本研究調査の試みは『セルボーン』書誌研究の大きな一歩となるだろう。『セルボーン』がわが国に受容されて以来、このような視点での本格的な書誌調査は筆者の知る限り我が国では前例がないからである。

本稿の冒頭で述べたように、本研究の最終目的は西谷退三訳『セルボーン』の訳出過程やその特質を明らかにすることである。その前段的研究として本稿ではホワイト『セルボーン』の書誌を可能な限り洗い出してきた。その背景には、その成立過程や各種刊本の特徴を踏まえなければ、西谷『セルボーン』の特有性を正しく評価することはできない、言い換えれば、西谷『セルボーン』が英語から日本語に置き換えた単なる翻訳物ではなく最も新しい『セルボーン』の1つの刊本である（森下 1958: 545）という仮説を検証することはできないという前提があったのである。例えば、本稿の随所で検討してきたように、いかなる出版物にも著者の誤解からくる誤謬や技術的なミスに起因する誤植、先行版を不批判に継承することによるミスなどがつきものである。もし仮に訳者が原著の書誌に無頓着で単に言葉を置き換えるだけの訳業範囲に留まってしまえば、読者はそれらの誤解や誤謬を残したままの書物を手にすることになってしまうのである。

原著 *The Natural History of Selborne* の調査にあたっては、渉猟すべき調査資料は膨大な量である。また本研究調査では、1789年初版から1920年代末までに刊行された刊本を主な調査の対象としたため、見落としている重要な書誌情報もあるだろう。諸賢による今後の研究をもって本研究の不備なるところを補い、より精度の高い同書書誌の完成を期待するところである。

謝辞

本研究調査の趣旨と意義をご理解の上、ホワイトや西谷退三関連の貴重資料の閲覧に対して格別のお取り計らいをいただいた高知県高岡郡佐川町・佐川町教育委員会及び同青山文庫の関係各位に衷心より感謝申し上げる。

主な参考文献[11]

Aikin, John (extracted), Gilbert White (1795). *A Naturalist's Calendar; With Observations in Various Branches of Natural History; Extracted from the Papers of the Late Rev. Gilbert White, M. A. of Selborne, Hampshire, Senior Fellow of Oriel College, Oxford, Never Before Published.* London: B. and J. White.

Aikin, John and William Marwick (extracted & adds.), Gilbert White (1802). *The Works in Natural History, Comprising the Natural History of Selborne, The Naturalist's Calendar, And Miscellaneous Observations, Extracted from His Papers. Second Edition. Vols. I & II.* London: J. White.

Allen, Grant (ed.), Gilbert White (1900). *The Natural History of Selborne.* London and New York: John Lane, The Bodley Head.

Bell, Thomas (ed.), Gilbert White (1877). *The Natural History and Antiquities of Selborne, In the County of Southampton. Vols. I & II.* London: John Van Voorst.

[11] 本参考文献リストでは、便宜上、編註者等が明確な『セルボーン』の各種刊本については、著者名 Gilbert White の前にそれを示した。

Bennett, Edward Turner (ed.), Gilbert White (1837). *The Natural History and Antiquities of Selborne, With the Naturalist's Calendar, And Miscellaneous Observations, Extracted from His Papers*. London: J. & A. Arch.

Buckland, Frank (ed.), Gilbert White (1876). *The Natural History and Antiquities of Selborne*. London: Macmillan & Co.

Davidson-Houston, Ronald (compiled), Gilbert White (1993). *The Illustrated Natural History of Selborne*. London: Thames Hudson.

Davies, G. Christopher. (ed.), Gilbert White (c1879). *The Natural History of Selborne, And the Naturalist's Calendar*. London: Frederick Warne & Co..

日臺晴子 (2019).「手紙とエコロジー ―『セルボーンの博物誌及び歴史的遺産』におけるネットワークの想像力」『エコクリティシズムレヴュ』第12巻、60-70.

Harting, James Edmond. (ed.), Gilbert White (c1875). *The Natural History and Antiquities of Selborne in the County of Southampton*. Fourth ed. London: Swan Sonnenschein.

Holt-White, Rashleigh (1901). *The Life and Letters of Gilbert White of Selborne. Vols. I & II*. London: John Murray.

Hudson, W. H. (1915). *Birds and Man*. London: Duckworth.

市河三喜編註釈／ Gilbert White 著 (1940). *The Natural History and Antiquities of Selborne*.（英文学叢書118）、東京：研究社 .

Jardine, Sir William (notes), Gilbert White (1833). *The Natural History of Selborne, Observations on Various Parts of Nature, And the Naturalist's Calendar*. London: Whittaker, Treacher, & Co. & Edinburgh: Waugh & Inns.

Jardine, Sir William (ed.), Gilbert White (1853). *The Natural History of Selborne, with Observations on Various Parts of Nature, and the Naturalist's Calendar*. London: Nathaniel Cooke.

Jesse, Edward (ed.) and William Jardine (adds. & notes), Gilbert White (1851). *The Natural History of Selborne; With Observations on Various Parts of Nature, And the Naturalist's Calendar*. London: Henry G. Bohn.

壽岳文章訳／ギルバト・ホワイト著 (1949)『セルボーン博物誌』（上下2巻）東京：岩波書店 .

門井昭夫 (2008).「ギルバート・ホワイト『セルボーン博物誌』の魅力」『健康科学大学紀要』第4号、85-98.

河野千絵 (1997).「『セルボーンの博物誌』について」『えちゅーど』お茶の水女子大学大学院英文学会、第27号、25-40.

Martin, Edward A. (1896). *A Bibliography of Gilbert White*. London: Roxburghe Press.

Martin, Edward A. (1934). *A Bibliography of Gilbert White, The Naturalist & Antiquarian of Selborne. With a Biography and a Descriptive Account of the Village of Selborne*. London: Halton & Co.

Miall. L. C., and W. Warde Fowler (eds.), Gilbert White (1901). *The Natural History and Antiquities of Selborne*. London: Methuen.

Mitford, Rev. John (selected), Gilbert White (1813). *The Natural History and Antiquities of Selborne, In the County of Southampton, To Which are Added, The Naturalist's Calendar, Observations on Various Parts of Nature, And Poems*. London: White, Cochrane & Co., &c.

森下雨村 (1958).「あとがき」西谷退三訳／ギルバート・ホワイト著『セルボーンの博物誌』非売品、高知県佐川：浜口直、543-547.

村端五郎・小澤萬記編 (2006).『西谷文庫目録 高知県佐川町立青山文庫』高知：高知大学人文学部 .

Nicholson, E. M. (ed.), Gilbert White (1929). The Natural History of Selborne. London: Thornton Butterworth.

西谷退三訳／ギルバート・ホワイト著 (1958).『セルボーンの博物誌』非売品、高知県佐川：浜口直 .

西谷退三訳／ギルバート・ホワイト著 (1992)『セルボーンの博物誌』新版、東京：八坂書房 .

ノラ・バーロウ編／八杉龍一・江上生子訳 (1972).『ダーウィン自伝』東京：筑摩書房 .

奥田夏子 (1976).「解説『セルボーンの博物誌』と自然風物エッセイの伝統」山内義雄訳『セルボーンの博物』東京：出帆社、390-397.

Prytherch, Ray (2005). *Harrod's Librarians' Glossary and Reference Book: A Directory of Over 10,200 Terms, Organizations, Projects and Acronyms in the Areas of Information Management*, Library

Science, Publishing and Archive Management. 10th edition. Hampshire, UK and Burlington, USA: Ashgate Publishing.

Sharpe, R. Bowdler (ed.), Gilbert White (1900). *The Natural History and Antiquities of Selborne and a Garden Kalendar. Vols. I & II*. London: S. T. Freemantle.

高瀬嘉男 (1937).「動物文学の作家と作品」『動物文学』 第30号、1-14.

竹友藻風 (1928).「セルボオンの博物学者」『思想』 第8巻82号、岩波書店、14-30.

山内義雄訳／ギルバート・ホワイト著 (1948)『セルボーンの博物誌』（上下2巻）奈良：養徳社 .

矢島祐利 . (1933).「ホワイト」『岩波講座世界文学』 第9巻、岩波書店、15-21.

Ward, Sir A. W., and A. R. Walter (eds.) (1913). *The Cambridge History of English Literature. Vol. X: The Age of Johnson*. New York: G. P. Putnam's Sons and Cambridge, England: University Press.

White, Gilbert (1789). *The Natural History and Antiquities of Selborne in the County of Southampton*. London: B. White and Son. (1972, A Scolar Press Facsimile edition).